

外陣講義文書

「第 1 講義文書」
(0 = 0 プロベিশョナー)

第 8 章

魔術的意志

- | | |
|------------|-----------|
| 1 | 真実の意志 |
| 2 | 観 想 |
| 3 | 魂の暗夜 |
| 4 | 靈魂の城 |
| 5 | 靈 操 |
| 6 | 道行き |
| 7 | テムラー |
| 8 | 天使ガブリエルの翼 |
| 課題瞑想：文字の瞑想 | |

THE OFFICIAL ORGAN
OF
I::O::S::

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::

First published 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

知識講座

1 真実の意志

信仰の世界では、「自由意志」の問題は深刻なテーマである。もし、全知全能の神が宇宙の森羅万象を洞察し、われわれの誕生の瞬間の産声から、思い悩む人生の道程、そして死の床の最後の吐息の瞬間までが予測され、神の予定調和のなかにあるならば、人間の自由意志とはそもそも何ぞやという問いである。

これに対する生々しい答えは旧約聖書の息子イサクの両手を縛って捧げものとしようとしたアブラハムの胸のうちにあっただろう。また、家族と財産の悉くを失い、身を腫れ物に覆い尽くされたヨブのなかにあっただろう。人間はその意志で神に従い、神に背くのである。

さて、問題を整理してみよう。ユダヤ教などの宗教は全知全能の神をイメージしている。われわれが作業仮説として、宇宙の全ての行為をあらかじめ記録してあるビデオテープを想定するならば、そのビデオテープは神の目となる。ところで、人間が自分のこれからの全人生を録画してあるビデオを見て、自由意志を保つことができるだろうか。何を考えていようと人生はそのテープのとおりに進捗するとしたら、かれには自由意志がないも同然である。しかし、ビデオがあることを知りながら、それを見ずに済ませた者は自由意志をもち続けることができる。つまり、自由意志は選択の可能性のないところには存在しないという自明の理が現れる。

ナチスの強制収用所のガス室に向かう行列に、少女のかわりに入ったラビの決断は、文字どおり死の選択であったが、かれには巨大な自由があった。

われわれは、いかに修行を積もうとも神のごとく全知全能になることはない。しかし、無知であるが故の偉大さ、完全なる自由な意志を奮う権利を与えられている。

インドの宗教では、これとはやや違う論理展開が進められる。バーガッド・バーギータの主人公は、御者に化身していたクリシュナに「行って汝のなすべきことをなせ。おまえの敵はすでに殲滅されている」と励まされ、戦に向かった。しかし、兄弟を倒しに出陣した王子は自分の役割を果たすことを、意志の力で選びとったのであり、人形のように操られて動いたのではない。ここでも自由意志の問題は生きている。

さて、魔術では人間の意志を幾つかのステージに分ける、

動物的意志	欲望、本能、情動に動かされる意志
理性的意志	理性によって制御され、計画的に目的を達成する意志
至高の意志	理性を超越した、直観的に働く意志

動物的意志は、本能的反射とも呼ばれる。殆どが一過性の欲望に支配されるが、性本能などが結びつくとき長時間持続することもある。動物がつかがいや子供を守り、巣をつくり、餌を運ぶのはかれらの内部にある動物的意志によるものだ。人間においては社会的規範や、さまざまなシステムによる複雑化が生じているが、基本的にはその大部分の時間を動物的意志で過ごしていると言える。順化行動と呼ばれる何も考えない動きは、動物的意志によるものだ。あなたは通学／通勤経路の大部分をとりとめのない思考と、身体にまかせた動きを想像してみると良い。

理性的意志は、長期的な目的を設定して動くものである。その目的は理性的思考に基づくので、こう呼ばれる。仕事のための学習、注文を取るための下調べ、マンション選び、外国語での会話、その他の脳の理性の領域を焦がして行う行為を押し進めるのは理性的意志であると言える。しかし、その源泉が理性的判断であっても、過程は動物的意志となるのは、ままたることだ。中学生が夏休みの旅行資金を溜めるために、新聞配達のアルバイトを始めたでしょう。最初は理性的意志により始めたものが、毎日のけだるい早起きと、単調な配達を支えるのは、ときおり閃くキャ

ンブ旅行のイメージではなく、習慣化したロボットの意志である。

至高の意志は、理性的判断さえ越えるものである。それは宗教家の召命、戦場における生命を賭した勇氣、芸術家のインスピレーションの瞬間などに現れる。その瞬間に愚鈍な理性が命じる方向とは逆に人間を押し進めるのが、至高の意志である。しかも、その結果は必ずしも社会的肉体的に有利になるとは限らない。生命を失い、名誉もなくすることがあるかもしれない。しかし、個人的に正しい方向に、理性的判断を越えて進む意志の最終進化形態がこれである。

われわれ魔術師は、この至高の意志を獲得しなくてはならない。と言うと、怪しげなお告げに頼って生きるという訳ではない。人間の意志は安きに流れるものだ。意志を進化させるには、訓練が必要である。



アレクスター・クロウリーは、この訓練を凄まじい覚悟で行った。⁽¹⁾

日常生活に禁止事項を課して、意識的にであれ無意識であれ、それを破った場合は、二の腕にカミソリで刻み目を入れたのである。⁽²⁾ 痛みとともに、意識は、肉体は意志の下にあり、その逆ではないという教訓を覚える。残念ながら、これは普通の生活者にお進めできる方法ではない。職場の同僚に、気味悪がられるだけであろう。イスラエル・リガルディーは、それよりましだと言って電気ショックを進めたが、それも大同小異である。現代的な修行法は、次のとおりであろう。

- 日常的なルールを定める。例えば、会話において一人称を用いない。敷居をまたぐときは、右足からまたぐ。午前中は飲み物を取らない。伝々。

それは、自分の生活に深刻な危機をもたらすルールであってはならない。それは無意識の動作、動物的意志に不快な中断を与えることを目的とするささやかな規制で良い。

- ルールを破った場合の罰則を定める。それは直ちに行い、意識的努力を必要とする不快なものであること。あなたがお喋り好きであるなら、1時間喋らない。その場で腕立て伏せを30回する。晩酌をやめる。等々、何でも良いが、ルールを破る頻度と罰則の内容は釣り合いが取れていなければならない。そして、必ず1対1で罰則を与えること。何も方法がなければ、思い切り二の腕をつねるというだけでも良い。

そして、重要なことだが、罰則を課しているのを他人に知られないこと。

- 結果を魔法日記に記録する。

(1) Aleister Crowley, LIBER III VEL JVGORVM, THE EQUINOX Volume I Number IX, York Beach : Samuel Weiser, 1992 (Reprint), pp.10-14.

(2) クロウリーはこれを「恐るべき畦道」(Aratrum Securum)と呼んだ(Aleister Crowley, MAGICK BOOK FOUR Part I-IV, York Beach : Samuel Weiser, 1994, p.648.)。

2 観 想

第3章では、カバラの瞑想の四区分について語った。その四区分は、西欧のキリスト教神秘主義でも同じように使われる。しかし、僧侶たちの間で発達した概念では、第1の「集中」と第2の「祈り」が融合して「祈祷」に、そして、第3の「観想」と第4の「瞑想」が融合して、「観想」となった。「祈祷」は全ての宗教において、顕教にも、密教にも用いられたのは言うまでもない。「主の祈り」すなわち、「汝が上に、御国と、力と、栄光あれ。永遠に、アーメン」なる短い祈祷文は、随分とポピュラーであり、しかも効果的だった。（「主の祈り」全文はこれより長い。）

さて、それでは一般の信徒には馴染みの薄いキリスト教の「観想」とはいったい何であろうか。それを知るためには、些か、古い時代のギリシャ神秘主義を探らねばならない。

ギリシャ語で神をテオス（θεός）と言う。ここから、神^{テオ}学^{ロギア}という言葉と観^{テオ}想^{オーリア}という言葉が生まれた。プラトンは、有名な「洞窟の比喻」をもって、我々が現象界で眺めているものが実相界の影に過ぎず、真の実在の領域を知るためには、観想を行う必要があることを示した。

さらに時代を下って、4世紀後半、小アジアのカップドキア地方に、「暗夜の神秘の父」と呼ばれるニュッサのグレゴリウスという初期の教父がいた。グレゴリウスは人間の魂が神へ向かう過程を、次の三つの比喻で表した。⁽³⁾

ホース 光	魂の道程の第1段階：浄化と照明、『箴言』 真理の光の照明により、誤謬の闇を払う。
ネベレー 雲	魂の道程の第2段階：力の蓄積、『伝道の書』 前進するにつれ、闇のなかに入りこみ、周囲は雲のように見通せない。
グノーボス 闇	魂の道程の第3段階：力の結実、『雅歌』 感覚認識可能なもの、理性認識可能なものすべてとの隔離。

これらは、『出エジプト記』におけるモーセと神の対面に由来している。（『出エジプト記』20.21）すなわち、『雅歌講話』に「偉大なるモーセに対して神の顕現は光によって始まった。そのあと雲を通して彼は神に語った。さらにモーセがより高く完全になると、彼は闇のなかで神を見るのであった。」とある。⁽⁴⁾

グレゴリウスは、探求されているものがあらゆる知を越えるため、闇のごとくしか知覚され得ず、モーセが知において大いなる者となったとき、彼は闇の中に神を見たと言ったのだと喝破する。⁽⁵⁾

この部分を、16世紀の偉大なカバリスト、ラビ・カィーム・ヴィタルが記述すると、「モーセのレベルは非常に高かったので、アツィルト界にまで上昇し、文字どおり神を見ることが出来た。しかし、それでさえ、鏡に反射する光を見るようなもので、ブリアー界の衣を纏ったうえのことだ。アツィルト界は不可視であり、『何人も神を見ることはできない』のである」となる。

ルドルフ・オットーは、この神秘体験を「畏怖と魅惑の神秘存在」（mysterium tremendum et fascinans）と表現した。

さて、グレゴリオウスの説明を続けよう。

(3) A. ラウス『キリスト教神秘思想の源流』教文館、1988年、146－152頁

(4) ニュッサのグレゴリウス『雅歌講話』新世社、1991年、263頁。

(5) Gregorius Nyssenus, *De vita Moysis I*, pp.162-164, PG 44, 376C-377B.

第1の道は、「光」の道である。

神に対する虚偽と惑わしの部分を放棄すること。虚偽なる実在、すなわち地上の闇を離れた魂は、唯一の真実、神（光）に直面する。この光による自己浄化と、情念からの解放が達成される。第1の道は、闇から光への移行でもある。

第2の道は、「雲」の道である。

覆われた物の認識の段階とも呼ばれる。被造世界の虚妄を知り、みかけの世界から真実を求めて、不可視の世界へ移行する。そして、被造世界における神の顕現を求めるのである。その過程において、雲のごとく現象界を包みながら、^{テオーラ} 靈魂が旅していく。しかし、神の栄光は理性や感覚的把握が可能なものではない。ただ、^{テオーラ} 観想により、「もろもろの天は神の栄光を語り告げる」のである。

第3の道は、「闇」の道である。モーセは神を見ずして、見ることができた。神は闇に覆われるがごとく、人間には直視し得ない濃密な光のなかにある。いまや、あらゆる方向から神の闇に取り囲まれつつ、感覚で把握し得るもの総てを外側に投げ去ってしまう。そのため神を見ることを可能とするのは、おのれの内部ある鏡に神の姿を映したときのみである。

グレゴリウスはこの「輝ける闇」という撞着語法を効果的に用いて表現し得ない状態を表現したのである。⁽⁶⁾ 上記の象徴表現に見られるように、闇の中の神の知（θεογνωσία）は、ひとつの靈的体験と言うより、靈魂のひとつの位相である。⁽⁷⁾

この神秘主義的伝統のもとに「魂の闇」の概念は偽ディオニシオス・アレオパギタの否定神学へと結びつく。肯定神学と象徴神学の捕えられなかった領域を探るため否定神学が生まれた。ここでは、「無知の知」（docta ignorantia）が高められ、否定する立場で、神の存在領域を探ろうとしている。ディオニシオスの言葉を借りると、「神のまします座に導くものの、神ご自身へと導くものではない。魂はしかる後に、神のまします深き闇に捕らえられつつ、完全に静止した受動的状態のまま、不可知なる神と不可知なる方法で結合する」のである。

知識を完全に静止させた受動状態（anenergesia）でしか、接触できない神を表現するため、かれは「非類似の象徴」（anomoia symbola）で神を語った。そこには再び、闇や雲が使われることとなる。

また、かれは『天上位階論』（De coelesti hierarchia）で、三位一体の「神的原理」を体言するものとして「天上の階梯」（天使的存在）を三つの階層に区分し、それをさらに三つの階級に分割している。天使の分類と意味については、第9章で述べる。

かれは、同様に『教会位階論』（De ecclesiastica hierarchia）第5章において、「教会の階梯」を下記のように関連づけている。⁽⁸⁾

原 理	第1の階級	第2の階級	第3の階級
浄 化	洗 礼	助 祭	未洗者
照 明	聖餐（聖体）	司 祭	受洗者
完 成	香油（堅信）	司 教	修道者

(6) 大森正樹『エネルギーと光の神学』創文社、2000年、92、93頁。

(7) ルイ・ブイエ『キリスト教神秘思想史 1：教父と東方の靈性』平凡社、1996年、304-307頁。

(8) Pseudo-Dionysius Areopagita, *De Ecclesiastica Hierarchia*, Corpus Dionysiacum, Edited v.G.Heil and A. M. Ritter, Berlin: Walter de Gruyter, 1991, pp.104-110.

3 魂の暗夜

さて、ここで生涯を神秘的瞑想のなかに送ったキリスト教の聖人たちについて語ろう。いずれも16世紀の修道院に身を置いた人物で、二人はカルメル会、そして、最後のひとはイエズス会の創始者である。

前項で見た「闇」と「夜」の観念は神秘博士 (Doctor Mysticus)⁽⁹⁾ と呼ばれた十字架の聖ヨハネにおいて、実践的な完成を見る。

十字架の聖ヨハネ (Juan de la Cruz, 1542-1591) ことホアン・デ・イエペスは、スペインのカスティーリア地方に生まれた。7歳のときに父を無くし、貧困のなか9歳のときメディナの孤児院に引き取られ、16歳でその才能を認められイエズス会の学校に入っている。かれは20歳を過ぎてから、召命を受け、カルメル会修道院に入る。25歳のとき、ヨハネはアビラのテレサと運命的に出会った。テレサの勧めにより、男子カルメル会の改革を行うため、ドゥルエロの地に新しい修道院を作った。

しかし、男子カルメル会の修道士はヨハネを危険視し、1577年にトレドで幽閉される。この暗い小部屋に押し込められた9か月の幽閉生活の間にヨハネは天啓を受け、その経験を『暗夜』に書き綴った。

1581年には教皇グレゴリウス13世の許可を得、改革カルメル会 (跣足カルメル会) を発足させる



かれの主著は、次の四部作構成となっている。

『カルメル山登攀』 (Subida del Monte Carmelo)

『暗夜』 (Noche oscura [del alma])

『霊の賛歌』 (Cantico espiritual)

『愛の生ける炎』 (Llama del amor viva)

興味深いことに、最初の2作の「山」と「夜」は、《地》の元素を、『霊の賛歌』のモチーフである泉は《水》と《風》の元素を、『愛の生ける炎』では《火》の元素を扱っている。ヨハネにとって四大は、地上の目に見えるものの表象であり、かれが示そうとしたのは四大を越えるものの。感覚的認識の外の世界であった。⁽¹⁰⁾

ヨハネは速筆の著述家で膨大な著作を著したが、同僚の修道会士による迫害にあった際に、その大多数の著作を廃棄させており、直筆の原稿及び書簡は殆ど現存していない。従って、われわれが現在目にする書物は、原典批判版とされたものでさえ、慣習的に認知されているテキスト (textus receptus) に過ぎない。⁽¹¹⁾

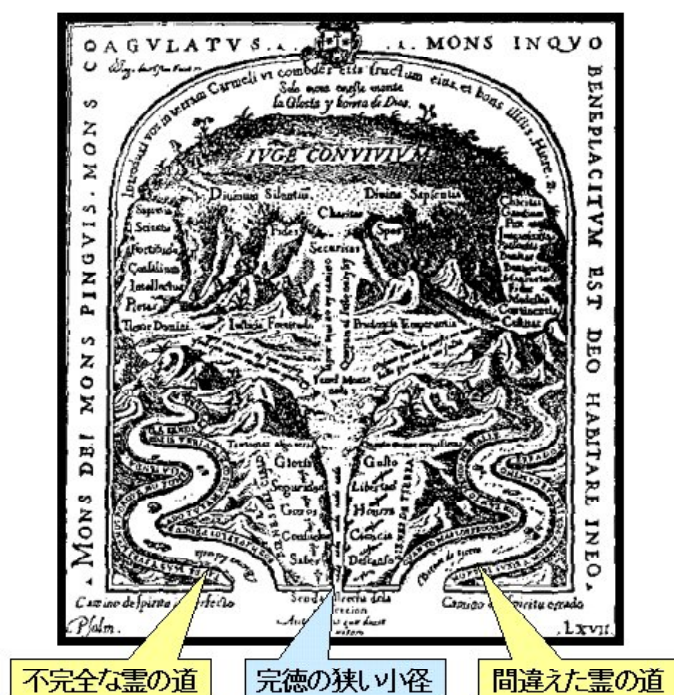
最初に、かれ自身の書いた著作から完徳の山の図を引用しよう。

(9) ラウス、前掲書、302頁。

(10) ホアン・カトレット『十字架の聖ヨハネの霊性』中央出版社、1982年、45-47頁。

(11) ルイ・コニエ『キリスト教神秘思想史 3 : 近代の霊性』平凡社、1998年、133-135頁。

完徳の山（El Monte de la perfeccion）の図



ここで興味深いのは、ヨハネが「この道においては、降ることが昇ることであり、昇ることが降ることである。」⁽¹²⁾ と言っていることだ。神の山を登るためには、信仰の夜や深淵を通して、心の奥底に下って行かねばならない。カバラのメルカバ神秘主義者が感得したのと同じ、上昇／下降の同義性に直面したのである。⁽¹³⁾ それは、かれの実践体験の深さを示している。山を登る者は、高く登れば登るほど、峰は遠く偉大に聳え立って見える。

『カルメル山登攀』で示された「魂の暗夜」という状態は、二つに分かれる。

すなわち、人間の努力により導かれる「能動的暗夜」と、すべての人為を放棄した上で神の恩寵として現れる「受動的暗夜」である。⁽¹⁴⁾

次作『暗夜』において、かれは「闇」→「夜」→「闇」という3段階の変化を記述する。

第1の闇は、人間の無知や罪である。宗教的な装飾を取り去れば、物質至上主義、現代の拝金思想などのことであろう。われわれの目を真実の世界から遠ざける幻の数々は、いかに美しく明るく見えても闇である。これはインドの幻世の思想に通じるものがある。現世の物質的外光は、カバラでは「黒い光」である。

第2の闇は、より積極的な闇で、神の方向を向くことにより道德的束縛も完全に脱却し、神へ到る暗い夜の道を手探りで近づく過程である。それは信仰の闇に包まれた夜でもある。

第3の闇は、神の放つ光があまりに眩いので、闇を纏うかに思えるモーセの体験と同じである。人間の卑小な感覚が麻痺してしまう状態を指します。

魂の暗夜を主要なテーマとした『カルメル山登攀』及び『暗夜』は、次の構成をもつ。⁽¹⁵⁾

『登攀』 魂の能動的暗夜 (noche activa del alma)

第1部 感覚の能動的暗夜

(12) 十字架の聖ヨハネ『暗夜』ドン・ボスコ社、1987年、II-18-2、254頁

(13) 「天界へ上昇するために下降する。」(Annelies Kuyt, *The 'Descent' to the Chariot*, Tubingen : J.C.B.Mohr, 1995, p.10)

(14) 十字架の聖ヨハネ『カルメル山登攀』ドン・ボスコ社、1969年、31頁。

(15) 鶴岡賀雄『十字架のヨハネ研究』創文社、2000年、156頁。

第2部 精神の能動的暗夜（知性の夜）
 第3部 同上（記憶の夜及び意志の夜）

『暗夜』 魂の受動的暗夜（noche passiva del alma）

第1部 感覚の受動的暗夜

第2部 精神の受動的暗夜

続く『霊の賛歌』においては、「この夜とは、靈魂がこれらを見たいと望んでいる観想のことである」と語られる。観想は、神に近づく手段であるが、ヨハネの場合、ニュッサのグレゴリウスが捕えたより深い意味を観想に与えている。

そして、怪魚の腹に呑み込まれたヨナのように、深い夜の闇を経験した靈魂は、昏々と湧き出る信仰の泉に出会う。「こんこんと湧きいでる泉をわれは知っている。夜にもかかわらず、」その後、神のモチーフは闇から泉に変わる。「永遠の生命に奔る泉」と。

さて、ヨハネは靈的発展の段階に名前をつけた。

浄化の道（VIA PURGATIVA）	初心者（PRINCIPIANTES）	感覚の黄昏（第1の夜）
照明の道（VIA ILUMINATIVA）	中級者（PROGREDIENTES）	精神の夜
統合の道（VIA UNITIVA）	完成者（PERFECTOS）	夜明け
神との対面（VISION）		昼間

状況描写が、たそがれ→夜→夜明け→昼間 と変化していくことに注目してもらいたい。これから、個々の状態について説明する。

第1段階の「たそがれ」は、感覚的欲望の浄化である。普通の人間は欲望の奴隷となり、飢えた狼のようにうろつき回っている。さまざまな欲望が作り出すものが「感覚の夜」であり、これは神の光が作り出す闇とは別物である。その欲望の過多は、「高慢」、「物欲」、「色欲」、「妬み」、「食欲」、「憤怒」、「怠惰」などの罪を生み出す。むろん、これはキリスト教による罪惡の解釈であるが、カバラにおいて「神に対し義なる者」と繰り返し言われるのも同じことである。これらの歪んだ精神状態が、秘教的修行の妨げとなるのも事実であろう。

「夜」については、これまでも様々な描写をした。

そして、「夜明け」を迎えた靈魂は、さまざまな靈的体験を得る。実際に観想により、靈的な恍惚を体験したヨハネの描写は含蓄の深いものがある。例えば、「聖靈からの注ぎ」と呼ばれる靈的体験では、その注ぎは、「炎」のごとくである。『愛の活ける炎』のなかには、次の描写がある。

「この愛の炎は、靈魂のなかで燃えあがり、炎を噴きだす火として感じているのである」

また、その靈的「ふれあい」の状況を描写したものとしては、

「おお、なめらかな焼灼よ。おお、やさしき深傷よ。おお、やわらかき手よ。

おお、たえなる接触、そは永遠の生命の…」

ヨハネは生涯を実践と学習のなかに過ごした。その生活の慰めは、同じ修道会に属する年長の婦人。それも極めて靈的な感覚に優れたアビラの聖テレジアの存在だったに違いない。

4 霊魂の城

十字架の聖ヨハネの時代から、僅かに時を逆上る。1515年の3月28日に、同じカステリア地方の裕福な貴族の子女としてテレジアは生を受けた。彼女の祖父ヨハン・サンチェス・デ・トレドは、改宗ユダヤ人だった。1485年にキリスト教に改宗したかれは、息子夫婦に並のキリスト教徒以上に熱心な信仰生活を督励するとともに、ユダヤ教の知識の断片を残していったに違いない。⁽¹⁶⁾

彼女の母は、(改宗者であったかどうか不明だが) 騎士道物語を隠れて愛読する風のロマンチストだった。裕福な貴族の子女がすべからず陥るように、テレジアも恋をした。しかし、かろうじて貞操を守りとおした彼女は、20才のときに、もうひとりの恋人の召命を受ける。

初期の彼女の霊的な訓練は、「ロザリオの祈り」と呼ばれるひとりで行う一連の祈祷により行われた。祈りそのものは現代でも行われる珍しいものではないが、祈りの最中に外の世界に対し、「自分を盲目、聾啞」にして。神へ集中するため「何も考えない」ことを実践し、彼女は「潜心」と呼ばれる当時流行の観想法を始めた。外的感覚遮断と内的雑音の低減、そしてロザリオのマントラとくれば、瞑想に必要な要素は殆ど含まれている。そのなかで聖書にちなんだテーマを強くイメージするのである。



例えば、彼女が好んだテーマは、マグダレナやサマリアの女の場面を想起するものである。そして、その聖書の風景を、自分に移して、自分でその風景を生き直してみる。つまり、積極的に聖書の世界を体験するのである。

「主がサマリアの女に話された『生ける水』のことを、何度思い起こしたことか。わたしは主に何度もあの『生ける水』を飲ませて下さるように、願い求めていました。」

これは夢のなかで語りかけるあの体験に似ていると感じるだろう。しかし、瞑想的手法は夢よりも早く無意識にアクセスする。彼女の内的体験は徐々に成熟していくが、キリスト教のさまざまな心理的ブレーキが、彼女の霊的な爆発を引き留め、その達成に驚くなかれ、20年間の空白期間を必要とした。

そして、この霊的な爆発は、彼女が41歳を迎える聖霊降誕祭の日に訪れた。その日を契機に、彼女は長い祈りの果てに、三つの神秘体験を引き続いて味わう。⁽¹⁷⁾

最初の『神秘的言葉』、つまり霊聴体験。

— 「主よあなたが発音されるのを聞いたのは初めてでした。『あなたはわたしに仕えなさい。そのほかのことには、何ひとつ煩わされてはいけない』わたしは、仰天しました。」

最初の『剥奪』、つまりアストラル体分離。

— 「突然、恍惚におそわれ、まるで自分の外に引き出されたような状態で、『わたしはもはや汝が人間と語ることを好まない。ただ、天使とだけ語れ』という声を聞いた」

(16) この推測については、聖ダビデ大学D・グリーン教授の『アビラの聖テレジアとヘカロート神秘主義』を参照されたい (Deirdre Green, "Saint Teresa of Avila and Hekhalot Mysticism", in *Studies in Religion/Scineces Religious* Vol.13, No.3, 1986, pp.279-287.).

(17) トマス・アルヴァレス『城の中へ：内住の聖三位に向かって』ドン・ボスコ社、1989年、173-175頁。

最初の『幻示』、これは霊視ではなく、魂による直接的認識のことである。

——「何ひとつ目で見たわけでも、魂の目で見たわけでもないのですが、わたしの脇にキリストが立たれたと思いました。わたしの右側にいつも立っておられるのを、はっきりと気づいていました。」

これらの体験は同じ日に起こったものではない。しかし、霊聴、脱魂、直接認識という深いレベルの神秘体験は、彼女の方向を変化させるばかりか、その後も頻繁にキリストを感じるようになる。

さて、アストラル体投射のさなかに上位の霊的存在と接触するのは、今日では割とありふれた事件だが、当時は慎重に話さねば異端審問の危険さえあった。そのため、彼女は後進に示す祈祷の指導書のなかで幻影に熱中する危険について言及している。⁽¹⁸⁾

この後、彼女の観想生活は益々深くなりキリスト降臨の幻視や、天使の臨在を折に触れて感じるようになる。

「すぐ傍らに身体をもったひとりの天使を見ました。かれは小柄で、大層美しく、火のように輝いて燃えるようなその貌は、かれが最高位の天使であることを物語っていました。」

ここで彼女の代表作、『靈魂の城』に触れねばならない。その著作は、靈魂を、ただひとつのダイヤモンド、または透明な水晶でできている城に譬えることで始まっている。⁽¹⁹⁾

この城には7つの宮殿がある。それは「棕櫚の果実のように幾重にも皮に取り巻かれたように」なっており、その皮の1枚1枚が宮殿である。つまり、核心にある宮殿を取り巻くように、同心円状（或いは玉のなかに玉が入るよう）に宮殿が築いてある。そして、人間の靈魂はこの城の外郭の宮殿から、ひとつひとつの城を通過して、城の中心に辿りつかねばならない。ユダヤ教の7宮殿の比喩との類似は明白である。ヘカロート神秘主義においては、第1の宮殿（イエソド——ヴィロン）から第7の宮殿（ピナー——アラヴォース）までを自在に通過する秘法を教えていた。しかし、テレジアにおいてはそういう魔術的要素は希薄であり、苦しい戦いと献身により、宮殿から宮殿へと靈魂の内部の深みに向かって旅をすることが語られている。それぞれの宮殿の特徴と、それを象徴する聖書の言葉は、以下のとおりである。（聖書はラテン語版であることに注意）

第1の宮殿——悪魔のもたらす暗黒との戦いの始まり。神とのか細いきずなの設立。

“Nisi Dominus aedificaverit domum in vanum laboraverunt qui aedificant eam”

「主が家を建てられるのでなければ、働くものは空しい」

（ヴルガダ聖書『詩篇』126章1）

第2の宮殿——初期の暗黒との戦い（「毒のある爬虫類から身を守る」）、粗削りの発展、霊的生命の危険の認識

“Nscitis quido petatis”「あなたがたは何を求めているか知らない」

（新約聖書『マタイ伝』20章22）

第3の宮殿——霊的な尺度の確立。

“Beatus vir, qui timet Dominum”「主をおそれる者は幸せ」

（ヴルガダ聖書『詩篇』111章1）

第4の宮殿——靈魂の一種の拡張状態、神の味わい（霊的静穏）の体験。同時に、溢れるほどの泉の水が、頭の上部にむかって流れていく感覚が語られる。

“cum dilatasti cor meum”「あなたがわたしの心を広くなさったとき」

（ヴルガダ聖書『詩篇』118章32）

(18) St. Teresa of Avila, *The PATER NOSTER of SAINT TERESA*, St.Meinland : A Grail Publication, 1954, p.110.

(19) イエズスの聖テレジア『靈魂の城』ドン・ボスコ社、1966年、9頁。

第5の宮殿 — 神との瞬間的な一致、直接的な神体験の始まり、霊的変容の開始。

“unita uestra abscondita est cum Christo in Deo” 「あなたの生命はキリストとともに神の内部に隠されてある」 (新約聖書『コロサイ』3章3)

第6の宮殿 — 想像のうちに錯覚を作るメランコリアとの戦い、靈魂の内奥から出る確信。受動的星幽体離脱「急激な奪い去り」、確信をもち神と深く交わること。

“viditque in somnis scalam stantem super terram et cacumen illius tangens caelum angelos quoque Dei ascendentes et descendentes per eam”

「ときに彼は夢を見た。ひとつの梯子が地のうゑに立ち、その頂は天に達し、天使たちが上り下りしているのを」 (ヴルガダ聖書『創世記』28章12)

第7の宮殿 — 神との充満した一致状態。

“Quo autem adharet Domino, unus spiritus est”

「主につくものは、かれとひとつの霊となる」

(新約聖書『コリント前』6章17)

5 霊 操

カトリックの修道院のなかでも戦闘的布教集団として恐れられたイエズス会のモットーは、「神のより大いなる栄光のために」(Ad Majorem Dei Gloriam)である。戦国末期の日本での布教については、世俗権力と密着したイエズス会と、民衆の草の根レベルを狙ったフランシスコ会が双壁であった。しかし、その後の禁教令によって双方とも壊滅的打撃を被ったのはご存知のとおりである。

ここではイエズス会の創始者であり、今日でも多数の人々が実践している霊的修行法を確立したイグナチオ・デ・ロヨラについて語ろう。

イグナチオ・デ・ロヨラ (Ignacio López de Loyola) は、かれがその名前を取ったスペインのロヨラ市で1491年12月24日に生まれた。長じて軍人となり、さまざまな戦争を勇敢に戦い抜いたが、パンプローナ市の包囲戦で足に銃弾を受け骨を砕かれて軍人生命を失った。その後、執筆生活を送ったが、突如として「黒い聖母」像で有名なモンセラットの修道院で剃髪した。この黒い聖母は、死と誕生を支配するビナーの地上的イメージそのものであり、かれの荒んだ軍人生活の心身の傷を癒してくれた。かれは独特の霊的トレーニング法を開発し、1528年にパリで6人の仲間を集め、⁽²⁰⁾ 1540年にはそれを母体としてイエズス会を設立した。この修道会は、イグナチオの経歴が強く反映して、しばしば、教皇庁相手にさえことを構えるほど戦闘的な集団であった。イグナチオ・デ・ロヨラは1556年7月31日に没し、後に列聖されている。



さて、イグナチオの霊的修行に関する基本的な考え方は、次のようなものである。

身体のために各種のスポーツや、運動があり、それら「体操」によって身体を健康を保つことができるように、霊を鍛えるための「霊操」によって、聖霊の動きにより心を開き、霊的に敏感になることができる。

イエズス会士は、霊操を自ら体験したのち、他の人に与える体験をもつように進められた。⁽²¹⁾

当然のことながら、『霊操』はキリストを中心に動く観想／祈祷システムである。ここでは、キリスト教徒でない読者にも抵抗なく読めるように、イグナチオの薦めた祈りの基本、祈りの技法、そして『旧約聖書』を中心とした素材部分について、項分けして述べる。

(20) イグナチオ・デ・ロヨラのパリ大学時代については、佐藤賢一が歴史小説のなかで見事に活写している (佐藤賢一『カルチェ・ラタン』講談社、2003年、随所。)

(21) イグナチウス・ロヨラ「イエズス会会憲」『宗教改革著作集』第13巻、教文館、1994年、364頁。

祈りの基本

基本的に靈操は、祈りを基礎に置いている。この場合の祈りとは、祈祷と観想をも含む広い概念である。

◎ 祈りの条件

祈りを成立させる最大の条件は「沈黙」である。沈黙は言葉に先立ち、言葉を中断し、言葉の余韻となる。人間の心に流れ込むさまざまな言葉の断片を沈黙で切り払うことが、重要だ。すなわち、神が訪れるとき、地は黙す。

◎ 祈りの姿勢

自分にとって祈りの助けになる姿勢を選んで、ひとつの祈りの間は、それを動かさないこと。ひざまずく、正座する、腰掛ける、立つ、身を投げ伏す、伝々。しかし、目立つ姿勢を衆人環境で行うのは進めたものではない。

◎ 祈りのための環境

祈りの助けになる環境も、妨げになる環境もある。暗い罪と罰について祈るときは、薄暗い静かな場所を選び、日常生活でも楽しみを避ける。この逆に天国のことを観想するときは部屋を明るくする等々。

◎ 祈りの時間

イグナチオの『靈操』のなかには祈りの時間が指定してある。規定の時間を守ることが重要である。

◎ 祈りの状態

祈りによっても心の「荒み」が治らないのはおかしい。また、祈っても何も起こらないのは普通の状態ではない。そして、1日中「慰め」の状態にあれば、それもおかしい。要は、祈りの体験を十分に味わいながら、同時に制御された精神状態を維持すること。

祈りの第1法：五感の活用

祈りの第1法は、「十戒」、「七大罪惡」、「人間の三つの精神的力」及び「五感」についてであるが、ここでは「五感」を取り上げる。

◎ 視 覚

心の目をもって、観想する神、天使、人間を見て、そのありさまを想起し、細かく観想し、見たところから益を得る。

◎ 聴 覚

心の耳をもって、かれらが語り、かつ語るであろうことに耳を傾ける。そして、そのことについて内省し、そこから何らかの益を得る。

◎ 嗅覚／味覚

心の鼻と口をもって、観想する神、天使、人間等の神性、靈性、善徳等のもたらす「無限のかぐわしさ」と「天界の甘露」を嗅ぎ、味わい、そのことについて内省することで、何らかの益を得る。

◎ 触 覚

心の手足等を伸ばし、かれらが踏んだ場所を踏み、座っている場所を抱く、服の裾に接吻す

る等、触感をもって触れることで、何らかの益を得る。

祈りの第2法：主の祈り

祈りの第2法は、ある決まった伝統的祈りの言葉を、ひとつひとつ単語を思いめぐらすようにして、味わうことである。ここでは「主の祈り」を取りあげる。

◎ 「主の祈り」本文

Pater noster qui es in caelis, sanctificetur nomen tuum :

天にましますわれらの父よ、願わくば御名が聖とされんことを

adveniat regnum tuum :

御国の来たらんことを

fiat uoluntas tua sicut in caelo et in terra.

御旨が天において行われるように、地でも行われんことを

Panem nostrum quotidianum da nobis hodie :

今日も、われらに日々の糧を与え給え。

et diminuite nobis debita nostra, sicut et nos dimittimus debitoribus

nostris :

われらが人を許すがごとく、われらの負い目を許し給え。

et ne nos inducas in temptationem :

われらを試みにひき給わぬよう。

sed libera nos a malo, Amen.

われらを悪より救い給え。アーメン。

(『マタイ伝』6章9～13が本文、上記は『ミサ典礼文集』より)

次の一文を加える場合もある。

Tibi sunt Regnum et Potentia et Gloria per omnia saecula saeculorum, Amen.

汝がために、御国と、力と、栄えあり、世々にいたるまで、アーメン。

なお、最後の1文は、第5章で触れたように、カトリックの『聖書』には存在しない。(最古のギリシャ語原文ではなく、英国ジェームス王版のみに記載。)

◎ 祈りの想起

時間内にその祈りを声に出して、または沈黙のうちに唱える。そして、祈りの言葉をひとつひとつ思い巡らす。

◎ 祈りの部分集中

祈りのなかのひとつか、ふたつの言葉に集中する。**Pater Noster**「天にましますわれらが父よ」など。

◎ 祈りの連続性

数日間祈る場合は、前日唱えた言葉に次の言葉をつないでいく。この方法で、1～2週間かけて祈り終わることもできる。

祈りの第3法：リズムのある祈り

これは、あるリズムに合わせて祈る方法である。「主の祈り」などの、良く暗記した祈りが良い。

◎ リズム呼吸

当然のことだが《黄金の夜明け》団等の4拍呼吸ではなく、自然なリズムで吐く吸うを繰り返す。

◎ 呼吸にあわせて祈る

吐く息と吸う息に合わせて、ひとつひとつの言葉を唱える。

(吸う) — 意識集中、

(吐きながら) — in caelo et in terra (天におけるがごとく、地にも)

◎ 祈りの集中

祈りの目標を定める。唱えている言葉の意味、祈りの対象となる神、天使、人間等の画像、象徴など。

聖書における祈りの素材

◎ 被造物としての人間：詩篇103章

詩篇を祈る方法については、ゆっくりと詩篇全体を通読して、自分の祈りとする方法、詩篇のなかで自分の感銘を受けた部分のみに集中する方法、祈りの間に数回詩篇を読み返す方法などがある。

◎ 創造主としての神：詩篇104章

◎ われらの神は主なり：詩篇105章

◎ 神に感謝：詩篇136章

◎ 神は間近にあり：詩篇139章

◎ 人間の創造：創世記1～3章

◎ 自由なる人間：創世記12章1～9及び22章1～18

◎ 原 罪：創世記3章1～19

実践講座

6 道行き

(1) 道行きの一般的特性

現代社会は自己の探求がむずかしい構造になっている。静かに人生や生命の意味に思い馳せようとしても、TVを見なければならず、新聞や雑誌が誘惑し、友人から電話がかかってくる。我々はますます自分を知る機会から遠ざかりつつある。

しかし、それ故にひとたび自分自身を知る機会を得たならば、それを真剣に利用しなくてはならない。

ここではまず先に述べた「観想」の現代的意味について再度検討しよう。カバラにおける観想は、主として『モーセ五書』の内容を使い、モーセやアロンの視点で「大いなる神」とイスラエルの交わりを追体験するものであった。

古代ギリシャにおいては、この観想は秘教的訓練の中核だった。ギリシャの代表的哲学者プラトンの語る「洞窟の比喻」が、観想の本質を正しく表している。洞窟の中で首を固定され、背後から照らし出された強い光で壁の上に移る影絵芝居を本物の宇宙だと思い込んでいる我々。観想とは、人間に定められた能力を越えて見ることである。影絵の世界劇場から目を離し、宇宙の本質たる根源存在を振り返り見ることだ。⁽²²⁾

こう語ると哲学的で難しいことのようにだが、その導入部は単純である。貴方の見ている世界を、想像力を用いてあるべき姿に直すだけだ。普段見る「夢」とか、「空想」は、この作業の基本な部分に通じている。

われわれがこの項で実証しようとしている「道行き」(Pathworking)の技法は、観想の技法の一部を参加型のシナリオに変えたものとも言える。事実上、「道行き」と「観想」を明確に分けるのは難しい。

一般に、「道行き」は、象徴的な物語を用いて意識を変容させ、その物語世界を門として、異界に入り込む方法である。通常意識を引きずっていれば、物語を聞いて考えているだけだが、うまく状況を制御できれば、単なるメンタル・イメージを越えて、別のリアリティを獲得することができる。それは象徴を鍵とした、別の生命の夢、霊的世界の旅である。

しかし、これも魔術技法の一部であり、長い訓練を通じて身につけるものである。従って、幾つかの段階があるのはやむを得ない。

例えば、モーセのエジプト脱出の様子を、映画「十戒」を見るように眺めるのは第1段階。即ち、道行きの初歩、または静的観想。

そこで、ポテトチップスと安楽椅子を捨て、彼に従うユダヤ人として、紅海の海底の軟泥を足裏に踏み付け、砂漠の熱砂を肌に感じるのが第2段階。これは、一歩進んだ道行き、または参加型観想。

ここで重要なことは、道行きを習得するためには、安全な傍観者として、情景を眺めるだけでなく、参加者としてその情景を「生きる」必要がある。参加型の道行きは、シナリオにはない対話型の道行きに容易に変化していく。言わば、これが第3段階である。

ここではシナリオ作業を考えているが、スクライミングと呼ばれる非シナリオ作業でも、参加

(22) プラトン『国家』下(514a-521b) 岩波書店(岩波文庫)、1979年、94-111頁。

するという要素は強まりこそすれ変わりはない。例えば、タットワ世界のひとつであるブリティヴィの幻視の中で、地のエレメンタルと出会い、これと会話し、これを案内者として異界を切り開いていくなど、あらかじめ予想がつかない分、非シナリオ作業の方が過激な体験を強いられるだろう。

(2) 能動的瞑想としての道行き

道行きにおける登場人物との対話は、第7章で解説したユング派のアクティブ・イマジネーション技法においては「人格化した無意識との対話」と位置づけられている。

たとえば、壁に向かって話し続け、壁が答えたとき、自分の無意識と対話していることを把握し、決して精霊と話していると考えないことを要求するのが能動的想像力の技法である。⁽²³⁾ その点において、自分の無意識と外的世界の連結を前提とする道行きとは異なるが、実践上は殆ど差異がない。特に、状況を主体的に変えることができることが、パッシブ・イマジネーションとアクティブ・イマジネーションとの重要な違いであることに留意したい。⁽²⁴⁾

アッシュクロフト＝ノーウィッキは、上記に留意して受動瞑想と能動瞑想を区分している。道行きは能動瞑想に当たる。⁽²⁵⁾ ノーウィッキがSOLの通信教育講座に記述した解説を以下に示す。⁽²⁶⁾

22 ……瞑想には様々な方法があり、その殆ど総てが効果的である。

ある行法は内的自己の様々なレベルに作用し、又ある行は特定の目的に用いられる瞑想にはパッシヴ、アクティブ、超越的（内的魂の深い部分を担う「沈黙の壁」がこの部類に入る）な黙想などがある。ここで一つ一つを取り上げて、瞑想とは何か、全体の概念をも把握していくようにしよう。

23 パッシヴ

このタイプの行法では、まず心身を落ち着けて、イメージが自由に心に浮かぶようにする。それらのイメージは追及せず、ただ心に浮かべてそれをそっと「押しやって」次のイメージがすぐ浮かぶようにする。しばしば、感情のコントロールを行う為に感情の反応を自由に許すこともある。このカテゴリーには総てというわけではないが、禅の公案も含まれる。公案は一見パラドキシカルな文で、精神を広げ、以前だと考えられない程心の範囲を拡大し、様々なことをインプット出来るようにする。最も有名なものの一つは、「片手で拍手をすればどんな音がするか」というものだ。それらは西洋人にとっては、馬鹿馬鹿しいと一笑に付されることが多いが、とんでもない話だ。公案は精神に強力な影響力を持ち、適切な時と場所を選んで行えば計り知れない価値がある。確かに、それらは禅の教義と共に用いられるべきだが、東洋の径の中では、公案は西洋人にとって最も応用しやすいものだろう。恐怖や心労などに苦しむ時など、心を落ち着かせる作用が必要な時には、公案は大変、しかも長時間に渡って効果がある。

24 パッシヴメディテーションは、連想であるといっている。例えば、レッスンや読んでいる本の中の未知の象徴を瞑想するとしよう。この象徴についての意味を知らなくてはならないのだが、図書など、通常の方法は有効ではない。そこでパッシヴ・メディテーションが知りたいことを知る方法として用いられるのだ。神り姿勢をとって、リズム呼吸を用いるのは有効だ。知りたい象徴を心に浮かべ、ゆっくりとイメージを引き上

(23) バーバラ・ハナー『アクティブ・イマジネーションの世界』創元社、2000年、39頁。

(24) 老松克彦『アクティブ・イマジネーション』誠信書房、2000年、8頁。

(25) Ashcroft-Nowicki, *SOL Preliminary Course Lesson 1*, Servant of the Light, n.d., c1970, pp.8ff.

(26) 『ホルスの槍』<SOL特集>Vol.1 No.5, I ∴ O ∴ S ∴, 1989年（SOL資料の翻訳許可：アッシュクロフト＝ノーウィッキ～秋端勉書簡、1988年。）。

げる。それを分析しようとしてはいけない、ただ、僅かにそれに注意を向けて、そのイメージを「浮かべる」だけでよい。同時に、心のこの象徴についてもっと知りたいという考えも留めておく。次第にその象徴は薄れて行き、次のイメージが出て来るだろう。この新しいイメージを知っていようといまいと、同様にイメージを浮かべるままにしておいて、それが薄れ、次のイメージが現れるのに任せておく。それはまるで内的テレビスクリーンに映る、象徴に対する無意識放映のようなものだ。この連想の中で、なじみの象徴が出て来るだろう。しばしば、その次に貴方が瞑想している象徴が現れる。これで一巡した訳で、貴方の無意識はその象徴に関する連想の鎖を与えたことになる。これらの象徴総ては、最初のものと同様である。神形、宗教、神話、万神殿である。この方法は意識と無意識の連携を強めて、魔法作業の基礎となる。無意識は今までに読んだり聞いたりした総ての情報とアクセスしているので、このような事柄には大きな力になってくれるのだ。又、単に個人の記憶だけではなく、それは民族の記憶、又は世界の記憶とも接点をもっている。つまり、無意識をうまく扱えば、それは大変有益な召し使いとなる、ということだ。

25 世界の記憶の貯蔵庫はオカルトの世界では知っておくと有益なことだ。初心者が、今までに知っている筈のない認識や情報に一人でぶつかるとはよくある。これは無意識が刺激されたのであり、結果として世界の記憶からの知識が彼に伝えられたのだ。私はこのことを事実として知っている。私の修行時代にもこのようなことはよく起こったし、私の学徒の間でもよく起こっている。長い時間電車に乗る時には、暇潰しにこの方法を勧めている。よく知っている象徴の一つを選び、同じ方法でその根本にまでたどって行く。これはある程度迄過去世にもさかのぼれる。尤も“ビューイング”という少し違った方法も用いられるが。

26 個人的なレベルでは、パッシヴ・メディテーションには、必要な時に平安な気持ちを齎してくれる。誰でも安らかな気持ちになりたい時があるし、この方法は必要な内的な平安を齎せるのだ。心を落ち着け、「内的スクリーン」に、黄金の太陽を思い浮かべてみよう。そう、直視出来る程度に穏やかな光…。太陽の暖かさが体を包み、総ての不安を取り除き、内的太陽の光の中でくつろごう。どんな形の病気、ショック、心配であり、朝夕これを執り行ってみて、一週間後、どれくらい改善されたか見てみるとよい。

27 人々はしばしば、多忙な中での僅かな自由時間を使って用いている。彼らは、ただ座っていかにか自由時間が少ないかを考えるのだ。結果は、さらに疲れるだけだ。これは彼らの関心が「時間」に集中していて、その関心を解放することがない為だ。本当にリラックスする為には、ただ座ってこう自由に語りかける。「私は十分、リラックスする時間を持っている」。そして、リラックスしよう。十分間後に人に会うことを考えること。貴方は今ここにいて、とてもリラックスしているのだ。十分たったら、自分に考えよう。さあ、待っている人の所へ行ってみよう。…すごく快く感じる。笑顔を作り、一日を他ならぬ貴方の為に使おう。

28 アクティブ

これがSOLコースで貴方がすぐに始めるメディテーションだ。これはは精神を刺激することを目的としており、ある人には高圧電線をつかむように強い効果を成す。他の人々にとっては、効果が出るのに時間がかかる。貴方がどちらのタイプかは問題ではない。ある瞑想は退屈で、他のものは爆発的な結果になったりする。ある場合には、次から次へ、まるで山の山羊のように理解が出て来ることもある。最初に学ぶべきことは、いつ止めるか、ということだ。これは、我々の考えでは、10分で十分だ。1時間もアクティブ・メディテーションを続けるのは自らトラブルを作る元だ。

29 アクティブ・メディテーションの基礎は、「思考の種子」を形成することだ。これ

は、禪の公案の ようなものだ。ただ、禪の公案程抽象的ではないが。この文が見られ刺激を受け、考えられ、思い巡らし、あらゆる角度から検討される。ついに、「認識」が自らの力によって得られる。この「認識」は非常に個人的なもので、それは貴方の点だ。これは、認識そのもので、それは貴方が今たどり着いた点を示すもので、又変わることもあるだろう。それは総てをやり直すことになる。事実、そのことはラフ・ノートを作る時によく起こる。他の認識から、また別認識が生じるわけだ。この場合は、後から、その認識をノートに付け加えればいい。次の視点から見るとよい。これは、又別の考えに導くだろう。しかし、いつでも思考そのものでもなく、考える力そのものについて学んでいるのだ。普通、同じことについて何日か瞑想する。

「道行き」の特徴として、作業者は次々と視点移動をしていく。つまり、異界の中を旅する必要がある。そこで道行きの参加者は、異界の体験に尻込みしてはいけない。自ら動くことで、異界は変貌し、その真の姿を表し、掴み取るべき情報や経験を送り出す。これはロールプレイング・ゲームに熱中する現代の若者には衆知のことだろう。旅に出なくては「経験値」は上がらないのだ。

我々魔術師が「道行き」の作業の中で学びとったものは、個々の魔術的体験の中に蓄積されていく。言い換えれば、記憶が透明になると同時に無意識の領域に沈み、再利用されるまで表面化しないエネルギーとしてプールされるのだ。忘れてはいけないのは、道行きの別名である観想とは本来は神^{デウス}を思う技であることだ。どんな道行きを行おうと、精神に負の影響を蓄積してはならない。黒魔術と俗に呼ばれる愚昧な行為を目的に道行きをすることは禁じられている。この作業は霊魂と直接交わるので、負の感情はストレートにあなたを撃つ。そのような行為は絹の手袋で、ドブを掬うようなものである。

西欧には道行きについて、書かれた本は多数ある。実際にシナリオを載せた本や、そのシナリオを朗読するテープなども売り出されている。しかし、基本的にはすべてのシナリオは自分の手で書くか、既存のものを自分の読みやすい、或いは聞きやすいものに書き直して用いるのが良いだろう。集団作業のシナリオの場合は、基本的な方向をねじ曲げる追加や解釈は困るが、書かれていない細部を補足するのは有効な場合が多い。要は、創造的想像力を十分に活動させることだ。

殆どの西欧魔術結社は、この道行きの技法を独自に発達させているが、初心者にも分かりやすく、内容のしっかりしたものと言うと、マリアン・グリーンの一連の著作で紹介されているグリーン・サークルの手法、シュタウゼイカー父子の主催する国際カバリスト団、そしてアッシュクロフト・ノウィツキー夫人の指導するSOL（光の侍従）であろう。

特に、最後の団体は、組織的な道行きのシステムを開発しており、われわれにも応用しやすい方法を公開しているので、その理論と技法について、次項で述べる。

(3) SOLの道行き

魔術の学院SOLでは、「道行き」の手順をかなり前から体系立てて整備していた。その指導書である『パスワーキング・シリーズ』第1巻の解説にはこう書かれている。⁽²⁷⁾

「どうやって始めるのか。簡単である。リラックスし、肺の中に溜まった空気が完全に新しくなるまで数回深呼吸をする。気持ち良く、しっかりと身体を支えてくれる椅子に座る。特に、頭と首の後ろを支えて楽にする必要がある。目を閉じて、最初の2、3日は正面の壁に頑丈な木の扉を建てるようにする。鉄の蝶番を持ち、大きな鍵穴に鍵の差し込まれた、堅いオーク材の扉を（想像力で）造りなさい。テキストに別の手段が示していない限り、（道行きには）この扉を使いなさい。

次の2、3日は、扉を開け、その中に2、3フィート入り込み、その後振り向いて反対側から扉を見ることを練習しなさい。これはあなたの背後がどんな風になっているか理解するために必要だ。あなたに示された道を正確にたどりなさい。あなたは妨害されないだろう。しかし、妨害を受けたら、心のスクリーンに、この方向から見た扉を瞬時に写しだし、安全に戻ることができる。多少の頭痛は残るかもしれないが、それ以上悪いことは起こらない。道行きの最中に迷子になってはならない。もし、計画した道からそれたらあなたは脅えるだろう。

この総ての作業は、実践され、試験されており、あなた自身に拘わる何かを教えるため、或は、あなたを自己理解の道に導くことなどの目的を持っている。あなたの精神は、知識の汲まざる井戸である。道行きは、あなたが深みや高所に飛び込む助けとなる」

随分と簡単に作業を要約したものだが、本質を外してはいない。

道行きは、簡単に言うと扉を開け入って戻って来る作業なのだ。

異世界へ通じる通路として、「扉」を、それも鍵のついた門扉を用いるのは初心者用の常套手段である。また、中級者用では、タロットの大アルカナの札を三次元映像にして通過するもの、ルーン文字を描いたカーテンをくぐる、霧の中に入るなどの様々な技法がある。

I ∴ O ∴ S ∴ の保有する、結社のアストラル神殿に至る道の入り口は、これらと若干違う。しかし、それは参入した正式の団員たるニオフアイト以上のメンバーにしか明かすことはできない。単に個人作業のため、道行きで異界の冒険をするのと、確固たる目的を持って神殿を訪問することを区別するため、手順を変えたのである。

ともあれ、ある種の手段を用いて「道」に入る。

次の手順は、自分の周囲にあらかじめ定めた世界を引き寄せる。または、自分がその世界に降りて行くことである。「道行き」における上昇と下降は重要な要素だ。先に示したように、キリスト教神秘主義者の重鎮、十字架の聖ヨハネは、神に至る黙想の道を登山の寓意で示した。これは神への上昇である。一方、初期のカバラ実践者、いわゆるメルカバ神秘主義者たちは、しばしば、内的世界への下降を語った。

上ることと下ことは、どちらも現在の存在平面を離れることである。水平の移動は距離を伸ばすだけだが、垂直の移動は高さ（深さ）という別の次元を加える。この意味は理性ではなく、直観で理解しなければならない。

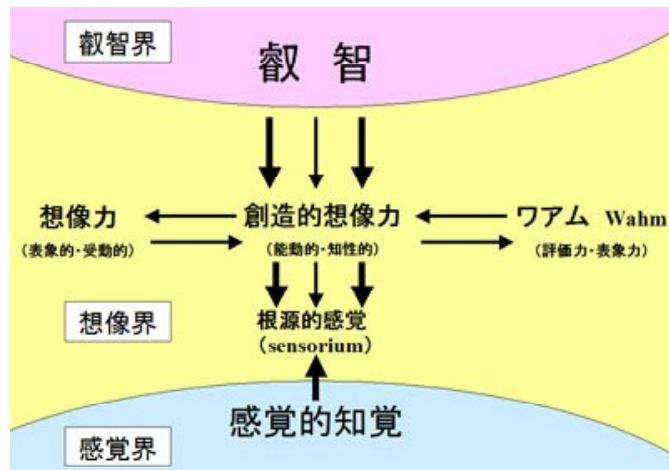
そして、あなたは強い想像力で、世界を構築する。DAN（ドロレス・アッシュクロフト・ノーウィッキー）は、「創造的想像力」という言葉を用いた。⁽²⁸⁾

この言葉は、ナポレオンの言行録の抜粋として紹介されているが、魔術の世界で使われた場合は特別な意味をもつ。高名なフランスの哲学者アンリ・コルバンが、イスラム神秘学者イブン・アラビーの研究のなかで「創造的想像力」という概念を提唱した。コルバンは神的存在の根源である叡智界と、人間が生活する感覚界との間をつなぐ「想像界 (Mundus Imaginalis)」

(27) Dolores Ashcroft-Nowicki, *The Hall of Mirrors*, SOL Pathworking Series No.1, n. p. , c1985, p.2.

(28) Dolores Ashcroft-Nowicki, *Highways of the Mind*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1987, p.35.

を定義し、その世界で被造物が能動的な想像力を働かせるとき、創造主の根源的な力に支えられた「創造的想像力」が発現するとした。⁽²⁹⁾



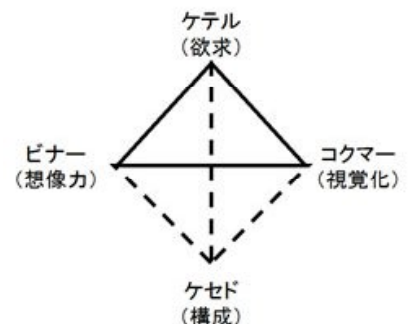
この「創造的想像力」が機能する神学的前提が、イブン・アラビーによる「不断の想像（反復想像）」の思想であり、われわれが強く想像力を働かせるときは、「創造主・被造物（*khaliq-makhlūq*）」における「対立物の合致（*coincidentia oppositorum*）」が働き、人間が創造するのではなく、創造主が働きかける。⁽³⁰⁾

コルバンは「想像力は空想などという卑しい形態ではなく、能動的想像力 (*quwwat al-khayāl*) またはイマジナトリックスである。」⁽³¹⁾と語った。

そして、この創造的想像力を駆使することが、道行きを成功させる最小限の必要条件だ。意識の世界では、想像力＝創造力である。強く豊かなイマジネーションは、世界を丸ごとひとつ作り出す。WEBの師匠DNFは、「魔術とは意識に変革をもたらす技である」と定義した。人間の意識が、巨大な種族意識の一部であり、さらにそれが種を越えて生命そのもの、宇宙全体と通底するなら、意識の変革は宇宙をも変えていくだろう。

そして、ノーウィッキは「因果の三角形」を示し、アストラル・ライトにおいて「想像力」がいかに機能するかを示した。視覚化と想像力は密接に関連しているが、同じものではない。⁽³²⁾

SOLは道行きの目的を「自己発見」に置いている。小宇宙としての自己を知ること、とりも直さず、宇宙そのもの、内在する神を知ることにつながる。古代ギリシャのデルフォイの神殿に刻まれた格言「汝自身を知れ」は、この作業の寓意である。



(29) 神谷幹夫「アンリ・コルバンの「創造的想像力」について」『時の現象学Ⅰ』（エラノス叢書1）平凡社、1990年、239－273頁。

(30) Henry Corbin, *Alone with the Alone : Creative Imagination in the Sufism of Ibn 'Arabi*, New York : Princeton University Press, 1998, p.215.

(31) Corbin, op. cit., p.187.

(32) Dolores Ashcroft-Nowicki, *Magical Use of Thought Forms*, St. Paul : Llewellyn Publications, 2002, p.73.

(4) 輝ける小径

DANが道行き専門の教科書として出版した本が数冊ある。ひとつは、『心のハイウェイ』で、これは解説書だ。もうひとつは、『輝ける小径』という「生命の木」の32の小径に関する道行きのシナリオ集である。後者について語ろう。これは類書があまりなく、カバラ的道行きの具体的技法をまとめて公開した点で比類のない資料である。

道行きと言うと最初に念頭に浮かぶのは、やはり「生命の木」の小径である。カバラの秘教体系のマンダラ図として、我々は「生命の木」を深く学ぶ必要がある。しかし、第11のアレフの小径について単に知識を並べるよりは、その小径ひとつを体験した方が理解が早い。

『輝ける小径』は、2部構成になっている。

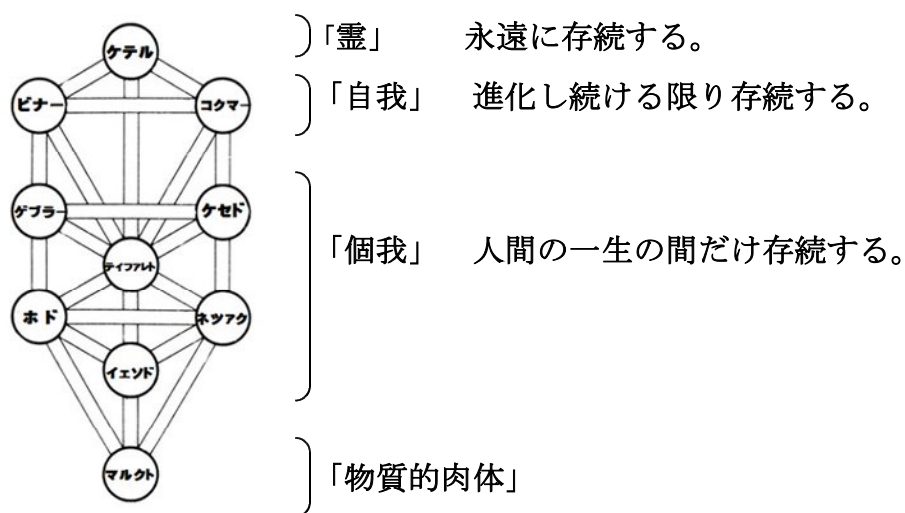
第1部は、活動的な小径、第11から第32までのセフィロトを連結する22の小径を描写する。

第2部は、受動的な、静止した第1から第10の小径、つまり、ケテルからマルクトのセフィロトにおける体験を扱う。

この本の最大の特徴は、活動的な22の小径を描写していることだ。ヘブル語の22文字と対応する小径群は、それぞれが神話的解释を受けたシナリオとして紹介されている。例えば、第29の小径、「カフ」、マルクトからネツァクは、テーマとして「肉の愛の進化」を扱っており、人類の父祖たちの意識の変革に大神パンと美神の交わりを絡めて印象的に完成されている。

内容を描写する紙数がないので止めるが、この書物はWEBの朋友ガーレス・ナイトの『カバラ的象徴の実践ガイド』と深く結びついている。

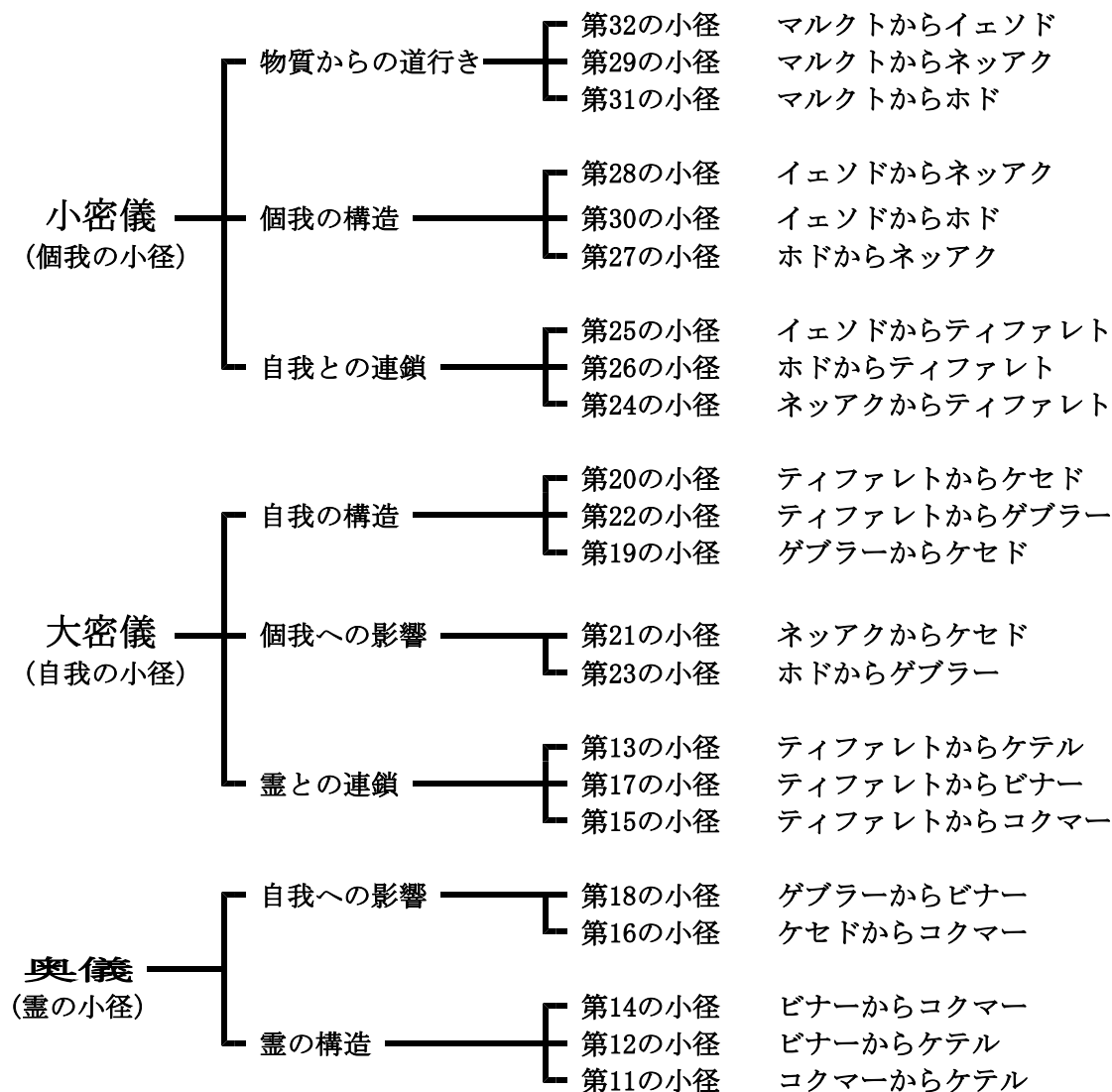
DANはナイトの著作を受け、人間の靈魂を生命の木の上に投影して、次のように捕えている。



生命の木

これはカバラで言う「魂の三段階」のSOL風解釈である。22の小径は、これら進化する魂への疑似参入体験なのだ。さらに、ナイトは22の小径を分割し、エレウシスの秘儀に倣って、次のように分類した。⁽³³⁾

(33) Gareth Knight, *A Practical Guide to Qabalistic Symbolism Volume Two*, Cheltenham : Helios Book Service, 1965, passim.



この配列は研究すると実に意義深いものがある。例えば、小密儀の最終段階である「自我との連鎖」第25、第24、第26の小径は神殿の帳を越え初めてティファレットに至る道である。これは、とりも直さず 5=6 アデプタス・マイナーの入門儀礼の迫体験（または、前体験）である。DANは、この体験を聖ヨハネの言葉を借りて「魂の暗夜」と呼んでいる。この場合、ポータルを越える志願者たちの体験を象徴的に表現している。

もちろん、道行きの訓練と入門儀礼では本質的な意味が違う。秘儀参入において加えられるものは、2、3時間の瞑想とは比較しようのない根幹的な変貌である。しかし、来るべき参入に備えて、未到の領域について学ぶのに道行きほど適切な訓練法はないだろう。

魔術師にとっては、「生命の木」を利用した道行きは必須の訓練法である。十分に象徴を理解した学徒ならば、何の準備もなく無造作に小径に踏み込んでいくだろう。

スクライミングを頻繁に実施した《黄金の夜明け》団においては、非シナリオ作業が主体だった。

しかし、非シナリオ作業では、初心者はしばしば何の成果も得られないばかりか、「境界の住人」(Dweller on the Threshold) に危害を加えられることも多かったのである。

シナリオ作業は、ある程度の体験の標準化を行うとともに、術者を脅威から保護する目的で発展してきた。SOLのシナリオは、その典型と言えよう。

さて、道行きから最良の結果を得るためには、いくつかの簡単な注意事項がある。

満腹するまで食事をした後に、試みないこと。この場合、気持ちよく眠るだけである。道行

きの最中は、注意力が最大限覚めていなければならない。

ゆったりとした衣服と静かな環境も不可欠である。なにより、だれからも邪魔されないことが大切だ。真っ暗にすると眠りを誘発するので、蝋燭のような仄かな明かりがあったほうがいい。

アストラル界で道に迷うかも知れないという愚にもつかない恐れを抱かないこと。初期の段階では、そのようなことは起こらない。また、よほどの愚行をしない限り、いかなる段階でも起こらないはずである。

あなたが出発点に戻って来るのに必要なのは、ただ自分の使った門、または自分自身の肉体を強く思い浮かべることだけである。

初心者への禁止事項は、同時に二つの小径を試すことである。少なくとも最低一年以上の経験を積むまでは、これをすべきではない。小径は常にしかるべき効果をもたらし、二つの小径は二倍の効果を意味する。

道行きでは、あなたが打ちたてるイメージの中にしっかり入り込み、そこで起きる総てのことを、あなたのアストラルの目で見詰め、確認しなさい、決して眺めるだけにはならないように。これにはしばらく時間が懸かるだろうが、いずれできるようになる。小径があなたの心の中に普段通いなれた道筋のごとく細部まで刻み込まれると、小径を自由に旅する自分を発見することになる。さらに熟練すると、望ましくない環境においても、小径を使えるようになるだろう。

平穏と静寂は訓練するためには必要だが、ひとたび、技術を身につけると、Jリーグの決勝戦の群衆の真中でも小径を使うことができる。

これらの小径は、イメージを誘導する魔術師や女祭司とともに、儀式的なかで使用することも可能であり、これは非常に強い効果をもたらす。

次にシナリオの1例を示す。これは『輝ける小径』のなかの1節である。⁽³⁴⁾

(34) Dolores Ashcroft-Nowicki, *The Shining Paths : An Experiential journey through the tree of Life*, Wellingborough : The Aquarian Press, 1983, pp.23-27.

(5) 道行きシナリオ：第32番目の小径

われわれを取り巻く普通の世界に注がれる意識が次第に遠のいて行き、それに取り代わって、われわれの周りにマルクトの神殿が立ち現れる。それは正方形をしており、黒と白のタイル張りの床がサンダル履きの足に冷たく感じられる。左手の壁は北に面しており、背後が西、右手が南の壁である。これら三つの壁には、豪華なステンドグラスの円窓がはめ込まれている。そしてステンドグラスの各々には、その方角を現す「聖なる生き物」が描かれている。北面は、艶やかな小麦と深紅のケシの輪の中に配された有翼の「雄牛」である。背後の西では、「鷲」が鮮明な青い空を太陽に向かって舞い上がっている。南では翼を持った「獅子」が炎に包まれて立ち、この場を守護している。

目の前の東の壁には、三つの重厚な樫の扉があり、その扉には、取っ手も錠も付いていない。扉の前に、床から天井にまで達する二本の柱が立っている。

向かって左の柱は黒檀で出来ており、右の柱は銀製である。両方の柱とも、彫刻と金めっきを施されたざくろを、その柱頭に頂いている。神殿の中央に、祭壇がしつらえてあり、それは磨き上げられた黒い木で出来た二重立方体である。祭壇は手織りのリンネルの布で覆われ、その上に麦の穂がばらまかれている。

祭壇の上に深い青色をした水晶の大杯があり、その中で火が燃えている。この火は、如何なるものであれ、「密儀」のあらゆる祭壇の上に認められるものである。火が灯されない限り、如何なる神殿であろうとも我々が本当に接触することはない。この照り映える光は、どの旅においても、旅人の心の中に携えられる。それは旅行者にとっては護符であり、われわれが内的世界で出会う者にとっては光の象徴である。祭壇の上に吊された青銅のランプは芳しいオイルを燃やし、神殿を精妙な香気で包んでいる。

祭壇の背後には、マルクトの大天使、サンダルフォンの姿が立っている。彼はカールした暗い色の髪を持った若者のように見える。そして髪にはブドウの房とブドウの葉を絡ませている。目は、大地がまだ若かった頃に獲得した叡知と、最早それほどでもない哀しみを湛えている。彼のローブは小豆色の赤と金と萌黄色の混合である。彼を包む大気は、微かな輝きと、彼の穏やかな印象が偽りであることを示す力のオーラで揺めく。

これから待ち受けている旅の心構えをしながら、我々は祭壇の前に立つ。その時、サンダルフォンは真中の扉の方へと移動し、扉の前の虚空に五芒星を描く。五芒星はしばらく燃え立ちながら空中に漂った後、徐々に消え失せていく。星がすっかり消え失せてしまうと、扉はタロー・カードの「世界」が描かれ、カーテンを作り出す。カーテンは段々鮮明になり、ついには32番目の小径に通じる三次元の扉になる。われわれは柱の間を歩む。踊り手は葉で編んだ花輪の中で制止している。そして、色彩の渦の中に一步踏み出す。

花々が色鮮やかに咲く野原の中に立った。左手には森があり、右には深紅のケシの花が転々と散った麦畑がある。前方には、草原がなだらかに傾斜して、平らな白い飛び石がある小川に通じており、他の傾斜には、石灰岩の断崖が上方に向かってそびえ立っている。そしてその戴きから滝がなだれ落ちて、その底に深い滝壺を作っている。我々の後ろには、二本の木が立っており、木の間にはタロー・カードがある。

右の方から泣き声が聞こえてくる。麦畑を通してこちらにやって来る一群の女性が見える。先頭は、背が高く、豊かに胸の成熟した美しい女性であるが、彼女の顔は深い悲しみで歪んでいる。彼女の手入れをしていない長い髪はもつれ、もう一人の女性が傍らから彼女を支えている。彼女の通り過ぎた大地は、萎れ、枯れ果てる。既に彼女の背後の野原は、萎び、褐色になっている。われわれは一団の一人に、「どうしたのですか」と尋ねると、「女神デメテルは、彼女自身の兄弟、ハデスにさらわれた娘を探しているのです」と答える。彼女が探している間、彼女は大地への関心を失い、総てが死にかけている。彼女たちが遠く過ぎ去った後、われわれは川に向かって下りて行き、その川を渡る。

断崖の下では、滝壺の傍らに古代のイチイの木が生えており、滝の後ろにある洞窟への入り口を半分隠している。これがわれわれの行く道である。洞窟は冷たくて湿っぽく、後ろの棚に置かれた小さなランプがこの洞窟を照らしている。暗がりの中から声が響いて来て、われわれ

がヘカテの洞窟に入ろうとする理由を尋ねる。われわれの目が弱々しい光に慣れると、洞窟の背後に暗い色のローブをまとった人影が見える。

その女神に向かって、「われわれはペルセポネの王国を探しているのです」と告げる。ヘカテは立ち上がり、棚の上からランプを取り上げると、ついてくるように合図をする。洞窟のちょうど真後ろに、侵入者を拒絶するような狭い通路があり、彼女はこれを指さして、「これがハデスの所へ至る道です。もっとも、敢えて貴方がたが、この道を行くならば、の話ですが」と告げる。彼女はわれわれにそれぞれ二個のコインとランプを渡すと、夜の訪れを待ち受ける為に座に戻る。

通路は洞窟よりもさらに冷え冷えとしており、床は滑りやすく、でこぼこしている。われわれはランプのぼんやりした光の中で、互いに見失わないように、手をつながなければならない。水の滴りが壁を伝って流れ落ちている。そしてその壁は、あたかもわれわれを窒息させようとするように、心に重くのしかかってくる。われわれはゆっくりと移動しなければならない。道は殆ど折り重なるくらいに体を曲げさせる、天井の低い所もあれば、無理矢理、押し通らねばならないほど、幅の狭い所もある。風は、苦痛に満ちた女性の声のように聞こえる、悲しげな音を響かせ続けている。これは、窮屈で曲がりくねり、何時までも下方に向かう道と相聞つて、我々がまるで、ある巨大な存在の産みの苦しみの中に、囚われたように感じさせる。ここで、冷たくなった手足を楽にする為に立ち止まる。そして流れる水の音に耳を傾ける。後もう少しで、われわれはゆらゆらと燃える松明に照らされた、地下の広い洞窟に達する。

氷の層は石の床に不思議な影を落とし、又、我々の遥か頭上の天井から凍った涙のように垂れ下がっている。この氷の場所の真中を通して、河が流れている。その流れは、暗く、深く、そして速い。この河は、その傍らで神々が最も神聖な誓いをするスティックスである。河の冷たい水は、生と死の間に自然の境界を設けている。川岸の柱に舟が結び付けられており、その傍らに一人の男が立っている。もし、彼が人間ならばの話だが。彼は背が高く、がっしりしており、濃い髭と暗い目を持っている。そして、その目は我々を凝視していた。寒さにも拘わらず、彼は皮のキルトと皮の小袋のついた幅広のベルト、そしてサンダルを身につけるだけだ。彼の周りには、身体を折って揺れているぼんやりとした人影が群がっている。まるで嘆願するかのよう、手を掲げ、人影は彼を引っ張り、掴もうとするが、その影のような手は、相手の身体を突き抜けてしまう。彼らは、渡し守りカロンがスティックスを渡す時に、死者に要求されるオボロス硬貨なしで埋葬された死者の影である。

カロンは霞のような人だかりを通り抜け、すたすたと歩む。彼らを脇に押しやると、我々に向かって、こちらに来るように手招きする。我々が近付くにつれ、亡霊どもが群がってくる。彼らの声は、我々の耳には弱々しいささやき声のように聞こえる。カロンは彼らにわれわれの為に道をあけさせると、彼らは涙を流して、悲しみのあまり手をもみ絞りながら退く。われわれが乗り込むと、舟は河に押し出される。舟は無言で進み、大気を掻き乱す物といえば、水面を打つオールだけである。カロンは櫂の方に身を屈めると、顔と髭の汗が、広い胸に玉となって滴り落ちる。

すぐに対岸についた。舟を離れる時に、彼に銀貨を一枚与える。彼は前方を指さし、松明の明かりのなか、上方の闇にまで達する巨大な二重の門が見える。各門の中央にヘブライ文字のタウがはめ込まれていた。それをよく見て、心に銘記しなさい。というのは、後で又それを見ることになるだろうから。門は音を起てて開く。深紅と灰色と紫とインディゴのくすんだタペストリが掛かった大きな広間に入る。それぞれの端には、浮き彫り模様のある鉛の王座がある。

その一方に「冥府の王」ハデスが座しており、もう一方には、ヴェールをつけた女性がヴェールの下に王冠を被り、銀の鎌を持っている。われわれはハデスの前に進む。我々が進み出ると、彼の足元の暗い陰からうなり声がする。黒い猟犬が起き上がり、こちらを直視する。近付くと、一つではなく、三つの頭をもたげ、じっと見ている。三つの双眼が我々に釘づけにされ、三つの赤い舌が、三つの歯の間から垂れている。ケルベロスはその闇の主人を守護している。

「死者の広間」に立ち、我々は畏怖しつつ王を見る。我々の目には、非常に背の高い、威厳のある一人の男が映る。彼は夜のように黒い目と彼によく似合った髪と髭を持っている。しかし彼が前屈みになると、目には微かな笑みが浮かぶ。漆黒の王冠が松明の光に輝き、ギリシャのチュニクからは老人の身体ではなく、運動家の四肢が見えている。彼は立ち上がり、ついて

来るようにとわれわれを招きながら下りてくる。彼は我々を「畏るべきペルセポネ」という名の、連れ合いのもとへ導く。彼女は「死者の女王」である。彼女の伯父にして、主人でもある恋人が近付くにつれ、彼女はヴェールを上げ、我々は花冠をつけた、がえんぜない少女の笑顔を覗き見た。ここには皺のより、肉の衰えた気配の老婆などはいない。そのかわりに恋人の腕に身を委ね、生命に満ち溢れた温かな気配を持つ女性がいた。この場所に行き着く、偉大なる者と卑小なる者、若いも若きも、男も女も、王と再生の妃が指名するまで、闇の中に下り行かねばならない。

彼らは惑星の父母であり、彼らから肉体の地上的成分を受け取るのである。

とある壁の上にタペストリーで覆われた鏡がかけてある。ハデスは我々をその前に立たせ、垂れ幕をめくって、その中を覗き込むように命じた。鏡の面は液体で出来ていて、動いていた。我々の心はその中に深く引き込まれていく。これは真実の鏡である。その中に見たものは、我々がこの世に形を取る前の、そして時の終わりにそうなるであろう、我々の真実にして源初の姿であった。

垂れ幕が降りたとき、ケルベロスだけが案内役として残っていた。別の扉を通じて、星に満たされた夜空の下の浜辺へ歩みで出る。指輪の上に輝く宝石のように、天空に低く土星が懸かっている。

月が海から昇り、その光がわれわれの足元を照らしてくれた。前へ進み出すと、足の下で、あたかも海は固体のように感じられた。

月球は水の上にたゆとい、海面をとある影が渡って来た。その半透明の深みから、月の女神御自身が歩み出てきた。神秘的な黒と銀の衣装をまとい、三日月形の髪飾りをつけ、彼女の子供たちに、生命の贈り物を携えてやってきた。

彼女はその腕にわれわれを抱き、胸の上であやした。この大地の総ての香りが髪の中から漂い、彼女のくちづけは、その不死性を別ち与えてくれる。われわれがその腕から離されたとき、もうこれ以上、彼女に依存してはならないのだ。自分自身に属する力を探すときが来た。今や、女神はビナーの座にあり、遠く離れ、月の光球へ戻っていった。われわれも浜辺に帰る。空に昇る蒼めた球体を見詰め、ケルベロスの吠える声に振り向いた。ケルベロスは主人の傍らを跳び回り、神と獣は果てしなき国の浜辺を人間のように戯れ歩く。

番犬と主人は静寂に覆われた無人の広間を通り、カロンの待つ氷の洞窟へ、われわれを案内した。カロンは2度目の銀貨を受け取った。舟の中に腰を据え、離岸していく間、沈黙して立つハデスの姿を見詰めた。我々が舟を降りるとき、哀しい幽霊たちが周りに集まって来た。次の機会には、ここに来る都度、幾らかを渡してやるために、余分の硬貨を貰えるようサンダルフォンに頼んでみよう。そうすれば、彼らも月の母神に会い再生することが出来るだろう。カロンに感謝の声を懸けると彼は沈黙の内に答え、われわれは帰還する道程を探した。道は見付かり、恐れることなく道程を急いだ。洞窟に戻るのが、ほんの数分のようなだった。われわれはランプを返し、そこを離れた。小川を越えるとき、見上げると夜空に月が高く懸かっていた。周りの大地は夜の音と匂いに包まれていた。デメテルとその娘は月光の中をともに歩いていた。彼女たちの笑い声を耳に、我々はタローのカーテンを踏み越える。

サンダルフォンが背後の扉を封印した。われわれは祭壇の前に立ち、感謝の言葉を述べる。微笑みとともに大天使は黒い柱の基台に置かれた銀貨の入ったボウルを示した。その中から自分達と幽霊たちに必要な分を取る。

周りの光景は溶け崩れ、日常の世界が現れた。最初の旅は終わった。

(注：このシナリオを用いる場合は、よく読んで細部まで暗記するのが、最良の方法である。しかし、そこまで記憶力が鍛練されていない場合は、あらかじめ自分の声でテープに吹き込んで再生するのも良い方法だ。そのときは、イメージを十分に作り出す「間」を置くことに配慮すること。)

7 テムラー

カバラ数秘術の第3は、 $\aleph \beth \aleph \beth$ (テムラー) である。別名 $\aleph \beth \aleph \beth$ (ツィルフ) とも言う。

ヨハン・ロイヒリンによると、サレムのラビ・小ヨセフはヘブル語の $\aleph \beth \aleph \beth$ (ガンツ)「楽園(複数形)」の各文字がゲマトリア ($\aleph$)、ノタリコン ($\beth$) 及びテムラー ($\aleph \beth$) を意味すると指摘した。⁽³⁵⁾

テムラーは、ヘブル語で「配列、並列、並び替え」の意味をもつ。ゲマトリアにより解析すると、数値は6 5 1で、「厳かに発言する」という意味の $\aleph \beth$ に等しい。6 5 1から神智学的減算により、1 2が得られる。すなわち獣帯の宮の数である。それは「洞察する」という意味の $\aleph \beth$ に等しい。また、 $6 \times 5 \times 1$ により30が得られ、これはラメドの数値である。タロー・カードの「正義」に対応する。これは2分されたテムラーの構造が、均衡を保つべきことを示唆している。

テムラーの基本的な方法は2 2文字を折り畳むことにあり、その方法は多々ある。⁽³⁶⁾

トラフテンベルグによると『セフェル・ゲマトリアオト』は16種類の、ギンズバーグは24種類のテムラーの技法を紹介している。⁽³⁷⁾

ここで紹介する技法は、コルネリウス・アグリッパが『オカルト哲学』第3巻第25章で紹介した「ツィルフ正表」(Tabula combinationum ziruph) から採用した22種類の技法であり、文字列の最初の4文字を取って、技法の名前とともにその鍵を表している。⁽³⁸⁾

第1法：ALBTh(アルバス)

K	I	T	Ch	Z	V	H	D	G	B	A
M	N	S	O	P	Tz	Q	R	Sh	Th	L

ALBThの数値は、4 3 3であり、ZKVTh(純粋な、無垢な)と等しい。

また、AL BThと見た場合、ALは「仲介する」(勿論、神の名前出もある。)という意味で、BThは「夜を過ごす」という意味である。これは、神性の仲介が闇を光りに導くことを意味している。この変換法は、風に帰属する。

さて、用法を説明しよう。この2行の文字列の上と下は相互に変換可能だ。すなわち、「頭」という意味のRAShという単語を変換すると、DLG(前に跳躍する)になる。

K	I	T	Ch	Z	V	H	D	G	B	A
							↑	↑		↓
M	N	S	O	P	Tz	Q	R	Sh	Th	L

神聖なる一者としての「頭」は、「前に跳ぶ」がごとく神性の火花を散らしている。また、別

(35) Johann Reuchlin, *De Arte Cabalistica On the Art of the Kabbalah*, Lincoln : University of Nebraska Press, 1994, pp.298f.

(36) Introduction by Maurice H. Harris, *Hebraic Literature : Translations from The Talmud Midrashim and Kabbala*, London : M.Walter Dunne, c1901, pp.268f.

(37) Joshua Trachtenberg, *Jewish magic and Superstition : A Study in Folk Religion*, Philadelphia : University of Pennsylvania, 2004, pp.263f.

(38) Cornelius Agrippa, *De occulta philosophia Libri tres*, Leiden : E. J. Brill, 1992, pp.473, 478.
Henry Cornelius Agrippa of Nettesheim, *Three Books of Occult Philosophy*, St. Paul : Llewellyn Publications, 1995, pp.539, 544, 764-766.

の例をあげると「覆う」という意味のChPHは、OZQ（囲い込む、輪）という意味になる。闇が広がる様は、神聖光を囲い込む様子に似ており「輪」で象徴される結合により、融和される。

第2法：ABGTh（アブガス）

L K I T Ch Z V H D G A
M N S O P Tz Q R Sh Th B

第2法の基本的な哲学は、2重性である。その性質は水星に帰属する。ALBThとの配列の差違は、右上（ヘブル語では、文字列の最初の文字）のアレフを固定して、上行のその他の文字を右へずらしたものである。そのとき、BとLは跳んでいるが。ABGThの数値は、406であり、GRGR（息の流れる喉の部分）に等しい。呼気と吸気は、出入の均衡が取れていないといけな。その意味で、この技法も言葉を均衡させる。神智学的減算では、10、ZG（一緒になる）と等しく、意味の等価的交換を示唆している。同様に、AB（父）及びGTh（食事の準備）から、父性と母性を引き出す。

L	K	I	T	Ch	Z	V	H	D	G	A
↑	↑						↓			
M	N	S	O	P	Tz	Q	R	Sh	Th	B

MNH（調和した分配）を、ABGTh変換すると、LKRとなり、これは意味をもつ単語でない。そこで、順序を入れ替えRKL（貿易する、交易商人）となる。他の例を示そう。

ChKL（赤き輝き）→ PNM（内部の）
PAR（美わしき）→ ChBH（秘密の場所）
RAM（持上げる）→ HBL（蒸発する）

第3法：AGDTh（アグダス）

M L K I T Ch Z V H D A
B N S O P Tz Q R Sh Th G

第3変換の帰属は月である。三位一体の調和を意味する。AGDThの数値は、408でChShQ（接続する、車輪の輻のような）及びQShCh（激しく、緊張感をもって）に等しい。GA（誇る）及びDTh（法）から確実な審判、神聖なる法の公布が読み取れる。

GOL（排斥）→ AIN（非存在）
I ShVOH（助け、救い）→ OHR I Sh→ ROH（養う）I Sh（要素、存在）

第4法：ADBG（アドバグ）

M L K I T Ch Z V H B A
N S O P Tz Q R Sh Th G D

第4変換の帰属は、金星である。父性を表す四角の存在は時間とともに変化していく。その背後には、金星の象徴する女性的魂（アニマ）がある。ADBGの数値は、10で、GZ（移動）に等しい。神智学的加算により55が得られ、KLH（花嫁）の数値となる。AD（霧の流出）及びBG（食物）は、成長するための変換を意味する。

第5法：AHBD（アハバド）

N	M	L	K	I	T	Ch	Z	V	B	A
S	O	P	Tz	Q	R	Sh	Th	G	D	H

第5変換の帰属は、白羊宮である。物体の四大と第5元素による常に変転する様を表現する。AHBDの数値は、12で、DGH（多重の）及びChD（洞察する）に等しい。AH（潜在的意志）及びBD（ひとつの）に分割される。

第6法：AVBH（アヴェバー）

S	N	M	L	K	I	T	Ch	Z	B	A
O	P	Tz	Q	R	Sh	Th	G	D	H	V

第6変換は金牛宮に帰属する。その哲学は、中心点、無限の地平線への集中にある。六芒星の中心には、六つの星に囲まれた太陽があることを思い起こすこと。AVBHの数値は14であり、HDH（引き伸ばす）及びGIA（大地に乗せる）に等しい。AV（根源を欲する）及びBH（完成、真空）に分割される。

第7法：AZBV（アズバウ）

O	S	N	M	L	K	I	T	Ch	B	A
P	Tz	Q	R	Sh	Th	G	D	H	V	Z

第7変換は双児宮に帰属する。2重運動、異なる領域との交信、神託等に働く。AZBVの数値は16であり、GBVH（高く持ち上げる）及びZVG（等しい）と同じである。AZ（そのとき）及びBV（交信する）に分割される。

第8法：AChBZ（アクバズ）

P	O	S	N	M	L	K	I	T	B	A
Tz	Q	R	Sh	Th	G	D	H	V	Z	Ch

第8変換は巨蟹宮に帰属し、その性質は、柔軟性、定常状態のなかの変化、低次の理由での変化は、常に高次のものとリンクする等である。AChBZの数値は18であり、ChI（生ける）に等しい。その神智学的加算は171であり、NATzL（流出せり）に等しい。その分割はACh（均衡）及びBZ（放棄）である。

第9法：ATBCh（アトバク）

Tz	P	O	S	N	M	L	K	I	B	A
Q	R	Sh	Th	G	D	H	V	Z	Ch	T

第9変換は獅子宮に帰属し、変化のなかの定常性をもつ。ATBChの数値は20であり、ChZH（場所を定める）に等しい。神智学的加算により210のHRH（高みに上る）が得られる。AT（傾向）及びChB（罰則）に分割される。

第10法：A I B T（アイベト）

Q	Tz	P	O	S	N	M	L	K	B	A
R	Sh	Th	G	D	H	V	Z	Ch	T	I

第10変換は処女宮に帰属し、定常的継続状態の頂点を意味する。A I B Tの数値は2 2であり、Z V V G（思春期）及びI Ch D（ひとつに結合する）に等しい。神智学的加算により2 5 3のNGR（広がる事）を得る。A I（決める）及びB T（眩く）を得る。

第11法：A K B I（アクベイ）

R	Q	Tz	P	O	S	N	M	L	B	A
Sh	Th	G	D	H	V	Z	Ch	T	I	K

第11変換は、運命の輪となる木星に帰属する。進行中の運命の破壊を意味する。A K B Iの数値は3 3であり、B L A（破壊する）及びG L（泉）に等しい。A K（確かに）及びB I（自分に関心を向ける）に分割される。

第12法：A L B K（アルバク）

Sh	R	Q	Tz	P	O	S	N	M	B	A
Th	G	D	H	V	Z	Ch	T	I	K	L

第12変換は天秤宮に帰属する。その特性は、結合させること、全体の完成のなかでより高次の機能と結びつける。A L B Kの数値は5 3 3 / 5 3であり、5 3 3に該当する語句はないが、神智学的減算により1 1、Ch G（循環する運動及び形態）が得られる。一方、5 3からはNG（光の反射）が得られる。A L及びB K（流れに縮小する）に分割される。

第13法：A M B L（アムベル）

Th	Sh	R	Q	Tz	P	O	S	N	B	A
G	D	H	V	Z	Ch	T	I	K	L	M

第13変換は水に帰属する。定常性に裏づけられた統合と、献身の愛が特徴である。A M B Lの数値は7 3であり、Ch K M H（賢者）及びCh S H（信頼）に等しい。A M（支持する）及びB L（混ぜる）に分割される。

第14法：A N B M（アヌバム）

G	Th	Sh	R	Q	Tz	P	O	S	B	A
D	H	V	Z	Ch	T	I	K	L	M	N

第14変換は天蠍宮に帰属する。変容に適用される力、自己の努力、思考などを特徴とする。A N B Mの数値は6 5 3 / 9 3であり、6 5 3では意味ある単語が見つからないので乗数を取り9 0のS L（持ち上げる）が関連する。9 3にはS G L（自分で造る）が対応する。A N（働く）及びB M（最も聖なる）に分割される。

第15法：ASBN（アスバン）

D	G	Th	Sh	R	Q	Tz	P	O	B	A
H	V	Z	Ch	T	I	K	L	M	N	S

第15変換は人馬宮に帰属する。個人の新しい属性としての統合が特徴である。ASBNの数値は763／113であり、763の神智学的減算で16のChZA（見る、焦点を結ぶ）が、113からPLG（流れる）が生まれる。AS（基盤）及びBN（分割）に分けられる。

第16法：AOBS（アウバス）

H	D	G	Th	Sh	R	Q	Tz	P	B	A
V	Z	Ch	T	I	K	L	M	N	S	O

第16変換は磨羯宮に帰属する。進むための基礎、位置の力を特徴とする。AOBSの数値は133であり、GPN（葡萄のつる）と等しく、乗数を取れば9のGAH（力強くなる）が得られる。AO（樹）及びBS（足蹴にする）に分割される。

第17法：APBO（アプバー）

V	H	D	G	Th	Sh	R	Q	Tz	B	A
Z	Ch	T	I	K	L	M	N	S	O	P

第17変換は火星に帰属する。強烈なエネルギーを特徴とする。APBOの数値は153であり、PGO（出会う、近づく）に等しく、乗数を取ると15のZCh（強いる）が得られる。AP（終わりに向かう）及びBO（基盤的な動き）に分割される。

第18法：ATzBP（アツバブ）

Z	V	H	D	G	Th	Sh	R	Q	B	A
Ch	T	I	K	L	M	N	S	O	P	Tz

第18変換は宝瓶宮に帰属する。宇宙の自然な外観、高次の幻視、霊的存在との交流などを特徴とする。ATzBPの数値は893／173であり、893の乗数216からDBIR（神託）が得られ、173からGL OINI（わが目に光を灯せ）が得られる。ATz（急ぐ）及びBPに分割される。BPから意味ある言葉はできない。ベスは家で、ペーは口であり、それは会話を意味する。

第19法：AQBTz（アクバツ）

Ch	Z	V	H	D	G	Th	Sh	R	B	A
T	I	K	L	M	N	S	O	P	Tz	Q

第19変換は双魚宮に帰属する。たの者や存在を完全に区分することが特徴である。AQBTzの数値は1003／193であり、1003からGRP（一緒に巻き込む）が、193の神智学的減算から13のZBD（を有する）が得られる。AQ（欠乏）及びBTz（柔らかい肉体）に分割される。

第20法：AR B Q（アルバク）

T	Ch	Z	V	H	D	G	Th	Sh	B	A
I	K	L	M	N	S	O	P	Tz	Q	R

第20変換は太陽に帰属する。源から輻射する流れ、エネルギーの生成などを特徴とする。AR B Qの数值は3 0 3であり、Sh A B（誘導された水流）と等しく、その神智学的減算の6からG G（引き出す、広がる）が生まれる。AR（流れ）及びB Q（空にする、空虚）に分割される。

第21法：A Sh B R（アシュバル）

I	T	Ch	Z	V	H	D	G	Th	B	A
K	L	M	N	S	O	P	Tz	Q	R	Sh

第21変換は火に帰属する。厳しい試練のなかの上昇と下降を意味する。A Sh B Rの数值は5 0 3であり、G R Sh（排斥）及びSh G R（放射）に等しい。A Sh（火）及びB R（浄化）に分割される。

第22法：A Th B Sh（アトバシュ）

K	I	T	Ch	Z	V	H	D	G	B	A
L	M	N	S	O	P	Tz	Q	R	Sh	Th

第22変換は土星に帰属する。外殻の構成、制限を受けることが特徴である。A Th B Shの数值は7 0 3であり、A B R K（祝福の父）及びG N（防御）に等しい。A Th（エッセンス）及びB Sh（弱体化する）に分割される。

これまで述べてきた22の変換法とは別の配列もある。

別法第1：A L B M（アルバム）－霊の配置

K	I	T	Ch	Z	B	H	D	G	B	A
Th	Sh	R	Q	Tz	P	O	S	N	M	L

この変換法は、肯定と否定の組み合わせが同時に機能することを意味する。A L B Mの数值は6 3 3／7 3であり、6 3 3からG L M（一緒に包み込む、胎児）及びG M L（再発）が、7 3からA M B L（第13法）が得られる。A L（仲介）及びB M（最も聖なる）に分割される。A L B Mは、次に述べる四つの変換法が四大の配置だとすると、霊の配置に相当する。

別法第2：A M G S（アムガス）－火の配置

B	D	V	Ch	I	K	T	Z	H	G	A
L	N	O	Tz	R	Th	Sh	Q	P	S	M

別法第3：M B S D（マブサド）－水の配置

L	N	O	Tz	R	Th	Sh	Q	P	S	M
A	G	H	Z	T	K	I	Ch	V	D	B

別法第4：ShBQD（シャブカド）－風の配置

Th	R	Tz	O	N	L	M	S	P	Q	Sh
A	G	H	Z	T	K	I	Ch	V	D	B

別法第5：ThBRD（サブラド）－地の配置

Sh	Q	P	S	M	L	N	O	Tz	R	Th
A	G	H	Z	T	K	I	Ch	V	D	B

これらの変換法を用いるときは、それぞれの元素の性格を飲み込んでおかねばならない。例えば、火の配置であるAMGSを用いるときは、より激しい結果になる。

△ APS（失敗） → MGH → GMH（敵対する力）

また、水の配置MBSDを用いるときは、より人間の感情に配慮する等。

▽ GBH（高められた） → NMO（保留する）

これらの変換配置を学習するためには、まず横長の厚紙を用意し、表にこの変換マトリクスをヘブル語で書き、裏に変換法の性格を書いておく。これまで見たように機械的に答えが出る訳ではないので、繰り返し練習することが必要だ。

8 天使ガブリエルの翼

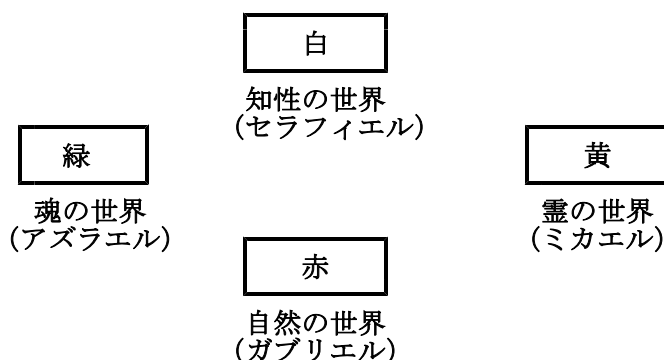
(1) 天使の流出論

イランにおいて10～11世紀に発達したイスマーイール・シーア派の流出論によると、原初的な大天使の10の位格の流出は、次のように行われる。第1のものは「叡智」(Aql)と呼ばれる。第2のものは、「叡智」の運動の結果、「靈魂」(Nafs)として流出する。この2者の対から第3の大天使「靈的アダム」(Adam Ruhani)が流出する。かれはデミウルゴス、または、ズルワーンとして顕現する。この靈的アダムは自己と永遠の存在化の世界に乖離があるのを見て驚愕しとまる。大天使が茫然自失している間に、第4から第10までの7つの下位の大天使が流出する。しかし、第3の大天使の遅延が故に下位の大天使にイブリースが生まれる。茫然自失状態から回復した靈的アダムは、下位の大天使の位格にイブリースが混入しているのを知ると、イブリースから自分自身を切り離し、地上に追放する。追放されたイブリースは、人間の顔をしたダイモンとなり地上に君臨する。一方、目覚めた第3階層の大天使、靈的アダムたる「人類の天使」は、プレローマの最後の階層である第10階層まで降格される。

スフラワルディーの解釈によれば、この第10番目の大天使はガブリエル(ジブリエール)、聖霊なる天使、認識の天使、そして啓示の天使である。

また、スフラワルディーの宇宙階層論によると、光の光からの流出としての下降的な段階である「縦の階層」(tabaqat-t-tul)、そして恒星天と接する「横の階層」(tabaqat-l-ard)がある。ここまでが「天使的宇宙」(ruhabad)であり、第2の「横の階層」にある主天使から第3の光の階層が恒星天を貫いて物質的宇宙(barzakh)に到達する。この光は地上の種を指導する天使＝靈魂の光の階層である。そして、種の主として人類を見守るのがガブリエルであった。

一方、天使宇宙を巨大な伽藍として俯瞰すると、『ハディース』にある主の玉座を支える4光に表象される次の宇宙観が顕れる。⁽³⁹⁾



(2) 対立物の合致

イブン・アラビーによれば、神とは「対立物の合致」(coincidentia oppositorum)の中でしか把握し得ない。それ故に、バシリデスの言う「否なる神」(οὐκ ὄν θεός)、または、テオス・アグノーストスである。この神は「創造主・被造物」と呼ばれ、君主にして、奴隷であり、崇める者にして、崇められる者であり、愛する者にして、愛される者である。

神と人間の合理を超えた合致は、信仰をキーワードとして成立する。神は宣言する。「天にも地にもわれを収める場所なし。ただ、真にわれを崇める者の心臓にこそ、われは収まる也。」これぞ「信念により創造される神」である。イブン・アラビーは、神は人間のこころ(心臓)が認識できるかたちで神をとらえるとき、自らを顕現すると説いた。人間の目ではこのかたちでしか純粹なる叡智を把握できないのである。

(39) Henry Corbin, *Temple and Contemplation*, London : Islamic Publications, 1986, p.27.

「信念により創造される神」という概念は、魔術の召喚の原理を正確に言い表している。
むろん、表面的な言葉尻を捕らえると、きわめて不敬に見える。しかし、神秘家の神髄は「われは神なり。」という神人不二の状態にある。

そして、シーア派神秘主義の天使論によれば、人間の思考は「思考の天使」である。それ故に秘儀伝授者の「良き言葉」、つまり、「地上の天使」の活動は、総体として「光の神殿」(hayakal al-nur)を形成する。

そのためには、「被造物」(al-khalq)のなかに「神性」(al-haqq)を観想しなければならない。この具体的な方法として、賢者が真の幻視を得るためには、三つの段階があるとされる。

第一は、叡智を所有する者(dhull-aql)となることだ。「被造物」の实在が、外形的、外面的なものに留まり、「神性」は隠蔽されていることを知るのだ。かれは「神性」という鏡に映された像として「被造物」を見るが、鏡そのものは見えない。

第二は、幻視を所有する者(dhul-ayn)となることだ。第一の者とは逆に「神性」を顕われたものとして捕らえ、「被造物」は「神性」を写す鏡であると見る。かれも鏡たる被造物は(真に)見えない。

第三は、叡智と幻視を兼ね備えた者(haqq al-yaqin)となることだ。かれは「被造物」のなかに同時に「神性」を見る。ヒエラティコスたるかれには、「多なるもの」と「一なるもの」は同義である。

参 考 文 献

- アンリ・コルバン『イスラーム哲学史』 岩波書店、1974年。
- アンリ・コルバン「マズダー教およびイスマーイール派思想における巡回する時間」『時の現象学』エラノス叢書1 平凡社、1990年。
- アンリ・コルバン「一神教のパラドクス」『一なるものと多なるものⅠ』エラノス叢書6 平凡社、1991年。
- アンリ・コルバン「秘儀伝授譚とイランのヘルメス主義」『エラノスへの招待』エラノス叢書別巻 平凡社、1995年。
- アンリ・コルバン『イブン・アラビーと創造的想像力』
Corbin, Henry. *Creative Imagination in the Sufism of Ibn Arabi*. New Jersey : Princeton University Press, 1969.
- アンリ・コルバン『アヴィケンナと視覚的リサイタル』
Corbin, Henry. *Avicenna and the Visionary Recital*. Irving : Spring Publication, 1980.
- アンリ・コルバン『神殿と観想』
Corbin, Henry. *Temple and Contemplation*. London : Islamic Publication, 1986.
- アンリ・コルバン『旅と伝令』
Corbin, Henry. *The Voyage and the Messenger*. Berkeley : North Atlantic Books, 1998.
- タックストン訳『スフラワルディーの幻視論』
Translated by W.M.Thackston, Jr., Ph.D.
The Mystical and Visionary Treatise of Shihabuddin Yahya Suhrawardi.
London : Octagon Press, 1982.

(3) ヴィジョナリー・リサイタル

この作業における魔術の教理及び技法的側面は次の三点である。

a 対立物の合致

最も危険なのは、書かれてある言葉を機械的に反復することである。人間の「言葉」は、その心臓に発する思いを乗せるとき「地上の天使」となる。決して安易な発声をしてないように、儀式中のアラビア語（一部、イラン語）は、殆どが聖なる言葉である。

b 三段階の顕現

対立の合致により、P Cの心臓に形成された霊的アダムの姿形の上に、創造の三段階をかたどり、大天使ガブリエルが顕現する。

c 説諭「天使ガブリエルの羽音」

スフラワルディーの同名の教説より引用した。⁽⁴⁰⁾

小五芒星の儀式で作業の場を払う。

ウシャブティをまとう。

部屋の中で西を向いて言う。

「かの主の慈愛と慈悲の御名において、かの主を讃えん。

汝は、創造主、慈愛にして慈悲、審判の日の王なり。

ここに、わが信念は、かの姿を出現させん。

ここに、わが信念は、かれを輝けるものとせん。

ここに、わが信念は、賛歌を歌わん。

かれはわが栄光をかかげ、信念をわが胸に高めん。

わが信念は汝に、汝が助力は我にある。

われを直線の径に導け、汝の恩寵へと至る径へ。

不敬をなし、墮落をなすことのないように。」

「わが声を聞け。おお、主よ。

汝は、隠れたるものにして、顕現せるものなり。

汝は、君主にして、隷属者なり。

汝は、崇拜者にして、信仰を集める者なり。

汝は、愛される者にして、愛する者なり。

名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。

汝の預言者、Navi（ナーヴィー）の祈りを聞き賜え。

汝が力を貸し賜え。

われは汝が光のなかで再生せんとす。

われは汝が光のなかで完成せんとす。

そは、次なる光なり。

Ta'wil（タウイール）、Intelligentia spiritualis、nous puneuma」

「汝は、われらの父にして、われらの母なり。

われらの栄光にして、われらの輝ける自己が顕現する。

(40) *The Mystical and Visionary Treatises of Shihabussin Yahya Suhrawardi*, London : Octagon Press, 1982, PP.26-34.

そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。
われは、隠れたるものにして、顕現せるものなり。
われは、君主にして、隷属者なり。
われは、崇拜者にして、信仰を集める者なり。
われは、愛される者にして、愛する者なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝の仲保者、Khidr（キドル）は祈らん。
汝が姿を顕わさんと欲す。
汝はわが心臓のなかで再生せんとす。
汝はわが心臓のなかで完成せんとす。
そは、次なる名なり。
himma（ヒンマ）、Animus、eithumsis」

「汝は、彗星より火を借り、光の戦を率いる者なり。
われらが足下に大地が見え、また天も見えるなり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。
汝は、隠れたるものにして、顕現せるものなり。
汝は、君主にして、隷属者なり。
汝は、崇拜者にして、信仰を集める者なり。
汝は、愛される者にして、愛する者なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が人間の天使、syzygiai（シジジヤイ）の祈りを聞き賜え。
汝が力を貸し賜え。
われは汝が力のなかで再生せんとす。
われは汝が力のなかで完成せんとす。
そは、次なる力なり。
quwwat al-khayal（クウワット アル・カヤール）、Imaginatrix、theoria」

「汝は、夜明けの薄明にして、黄昏の薄明なり。
われらが影のはずれに来たとき、太陽はわれらの頭上にあり。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「わが声を聞け。おお、主よ。
われは、隠れたるものにして、顕現せるものなり。
われは、君主にして、隷属者なり。
われは、崇拜者にして、信仰を集める者なり。
われは、愛される者にして、愛する者なり。
名前なき、形なき者、万物の創造主、光と闇の主なり。
汝が長老、shaikh（シェイフ）は祈らん。
汝が姿を顕わさんと欲す。
汝はわが合一のなかで再生せんとす。
汝はわが合一のなかで完成せんとす。
そは、次なる名なり。
huwa la huwa（フワ・ラ・フワ）、Deus abconditus、theos agnostos」

「汝は、月の秘薬たる光にして、太陽の秘薬たる光の光なり。」

われらが玄妙なる物質の心的王国を越えるとき約束は成就せん。
そは本然の性、始原の光体なり。」

「汝は、われらが主にして王、至高至聖なる霊なり。
汝、燦然たる神の光を身に帯びたる者よ。
汝は聖霊の天の父にして、宇宙の母なり、しかして、心の天の子なり。
われらは汝を召喚し、汝に満たされんとす。
汝、輝く闇、aswad nurani（アスワド・ヌラーニー）！
この血に降下し賜え。
汝、最初にして最後の者、al-awwal al-akhir（アル・アワール アル・アヒル）！
この肉に降下し賜え。
汝、創造主にして被造物、khaliq-makhluk（ハーリク・マハルーク）！
この骨に降下し賜え。
第1の顕現、tajalli awal（タジャーリ・アワール）！
本質の本質への顕現はなされた。
第2の顕現、ta'ayyan awal（タッアヤン・アワール）！
名と属性の顕現はなされた。
第3の顕現、tajalli wujudi shohudi（タジャーリ・ウジュディ・シュフディー）！
形相への顕現はなされた。」

頭上に覆い被さるように出現する巨大な天使の像がウシャブティを呑み込む。アケファロスの顔のないオーラに、人類の大天使ガブリエルのテレズマ的姿形が融合し、再形成されて霊的外形が急激に変化する。

宣言する。

「われは、非在にして在る者なり。
五界を結ぶは、われなり。
軸と輪を束ねるは、われなり。
われは光と闇の轆轤を回さん。」

アストラル・ライトにガブリエルの翼を東の壁いっぱいに広げて言う。

「ガブリエルは二枚の翼をもつ。

右の翼は純粋な光であり、人類の天使たるガブリエルと主の関係の象徴である。

左の翼は、闇の軌跡を顕す。あたかも孔雀の足跡にも似た月面の暗い斑のようだ。

それは彼の存在の片方が非存在へと向かうことの印である。もし、彼の存在のなかで、神への関係を探すならば、そこに神の存在への帰属を見るであろう。もし、かれの精髓たる実在を見るなら、それは非存在とそれに随伴する可能態存在の同時のあらわれを見ることになる。これら二者の微妙な意味は、二枚の翼とおなじく、右は神との関係を、左は魂の内部にある精神的存在の実在を象徴している。

ある光がガブリエルから墮落したとき、それは劣位の言葉と呼ばれる言葉になった。

この世の不信心者すら、言葉をもつ。彼らも魂をもつからだ。しかし、彼らの言葉は、地上の音と混交している。

ガブリエルの左の翼からは影が落ちる。そこから慢心の世界が生まれる。

神は、闇のなかに、宇宙を創造した。その後に自らの光を注いだ。

闇のなかに、宇宙を創造したというのは、左の翼の暗黒を指す。

その上に自らの光を注いだというのは、右の翼の光を指す。

栄光の書のなかで、神は光と闇とを定めたとある。

闇とは慢心のことを指し、闇の後から来る光とは、右の翼から指す光を示す。

慢心の中に指し込むすべての光線は、聖なる者の光から来るからだ。

かれは、その上に自らの光の幾ばくかを分かち与えた。
そして、神の高みへと、良き言葉が上昇した。この光も、あの光線に由来している。
良き言葉を表す寓意は、劣位の言葉が輝くことである。
もし、劣位の言葉がないなら、誰が神の御前に上昇できるだろう。
この言葉は、霊と同じ意味をもつ。
やすらぐ靈魂とは、汝の主にもどりきたり、喜び安らぐ靈魂を意味する。
それ故に、音と影からなる慢心の世界は、ガブリエルの左の翼であり、
霊智に照明された魂は、ガブリエルの右の翼である。
右の翼からは、東方なる真実、聖なる宣言、その他さまざまな事柄が魂の意識的な部分に入る。
怒り、恐怖の叫び、そして最後の日のさまざまな事柄は左の翼から生じる。
汝ら、地上の天使たちよ、これの象徴を忘れず、言葉のなかの光を見るべし。」

「聖なる非在の主よ。

al-awwal al-akhir (アル・アワール アル・アヒル) !

万軍の将、霊の虚の場所に住まわん。

khalīq-makhlūq (ハーリク・マハルーク) !

戴冠せる王、霊の虚の場所に住まわん。

第3の顕現、tajalli wujudi shohudi (タジャーリ・ウジュディ・シュフディー) !

汝は、形相より去れり。

第2の顕現、ta'ayyan awwal (タッアヤン・アワール) !

汝は、名と属性より去れり。

第1の顕現、tajalli awwal (タジャーリ・アワール) !

汝の本質は、本質より去れり。

光と闇の轆轤を逆転し、魔術師の肉体を脱ぎ捨て、光へと帰還せん。」

「主よ、われらの賛歌を聞きたまえ。宇宙の韻律と調和に、感謝を捧げん。

主の聖霊は、森羅万象の上にあり、下にあり、内にあり、外にもある。

主よ、生ける霊と人の子らに、法悦と祝福を与えたまえ。

霊的なアダムは、肉の衣を去れり。」

大天使ガブリエルのテレズマ的姿形が背中からすっぽりと抜け、頭上前方の西の空に巨大な翼が消えていく。

ウシャブティを解放し、小五芒星の追儼儀式を行う。

第8ヶ月目の瞑想

瞑想課題：三文字の瞑想

今月の瞑想は、ヘブル語の三つの母音アレフ、メモ、シンを用いる。

この母音の音の特徴について考えるならば、アレフ（𐤀）は「沈黙」であり、メモ（𐤌）は「単純音」であり、シン（𐤑）は「ホワイト・ノイズ」である。少し説明を要するかもしれない、𐤀が「音のない音」すなわち、発声しない音である。𐤌は、波高の揃った音であり、ひとつの連続した波動として空間を伝播する。一方、𐤑はすべての音を混ぜ合わせたアマルガム状態である。白熱電球の光が、白という単一の光ではなく、さまざまなスペクトル領域の光が混ぜ合わさってできたように、𐤑音はひとつの「混沌のパターン」である。

この三つの文字を特殊なマントラとして用いて、意識の変成状態を導くのが、今回の課題である。インドの行者が、AOM（アオム／オーム）を振動させるように、あなたのオーラを含めた全身を用いて、この三文字を発音しなさい。

𐤀：沈黙、無声

𐤌：Mmmmmm

𐤑：S h h h h h

瞑想は、次のように開始する。

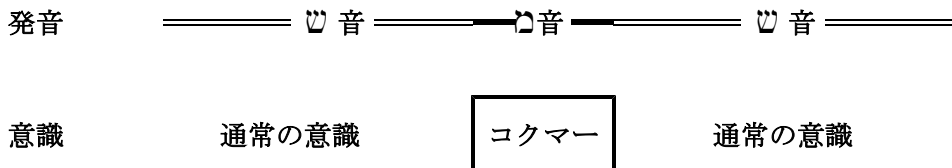
◎ 第1週は、次のように瞑想する。

最初に 𐤑 音を唱え、十分に振動を感じたら 𐤌 音に切り替える。

最初のうちは、𐤌 音は数秒しか続けてはいけない。そして、再び 𐤑 音に戻る。

これを肺に負担にならないようにして、何度か繰り返す。訓練の初期では、1分で十分である。馴れてきたら、5分に延ばしても良い。

𐤑 音は通常の意識状態を象徴する。一方、𐤌 音は高度な意識水準、いわゆるコクマーの意識に該等する。瞑想を通じて、意識の止揚を試みなさい。



◎ 第2週は、第1週の 𐤑 音と 𐤌 音の切り替えを声に出さずに行う。

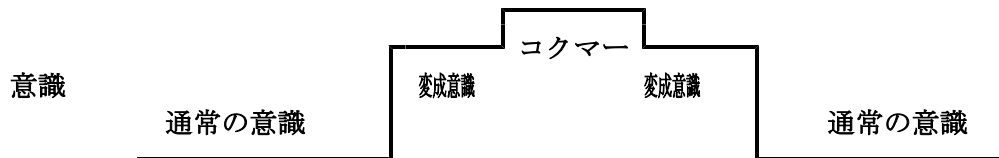
このやり方は、実際に発音する場合より、難しい。それぞれの音は身体の内側に留まり、胸の内側を振動させながら、やわらかな放射光に変化して、オーラに滲み出していく。全身のオーラが、音により活性化し、意識状態が切り替わるのを感じるように努めること。

声をださないことによって、肉体の感覚は逆に研ぎ澄まされる。全身が1本の楽器と化したように、あなたの肉体をふたつの音で吹き鳴らしなさい。

◎ 第3週以降は、𐤆 音と 𐤇 音の間に 𐤍 音を加え、有声で行う。

音のない 𐤍 音は、nihil（無）または、inanis（空虚）である。𐤍 は、𐤆 と 𐤇 に囲まれ、その両者を仲介する。われわれの立つ大地（𐤆𐤇𐤍）は𐤆𐤇 𐤍（アレフ + 走る）すなわち、「駆けるアレフ」である。無声の音が宇宙をつなぎ止めている。

発音 ===== 𐤆 音 ===== -- 𐤍 音 -- 𐤇 音 --- 𐤍 音 ===== 𐤆 音 =====



注意：これらの瞑想は、一朝一夕にできるものではない。なかなか、肉体と精神の双方を制御することはできないだろう。うまくできない場合でも、その気配だけでも味わいなさい。そして、いつの日か、意識の変成状態を越えて高次の意識にたどり着くことを祈願しなさい。

この瞑想は肺に負担をかけるので長時間行っはいけない。しかし、時間を変えて、たびたび行うのは良い。特に、第2週の瞑想は、周囲を気にせずできるので、電車のなかでも、オフィスのコーヒープレイクでも実施可能である。今月の修行が終了した後も、機会を選んで試みてみると良いだろう。

今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。図書館で読むのも良いが、必読図書については購入することを勧める。

1 必読図書

今月の学習の参考となる著作は以下のとおりである。

A. ラウス 『キリスト教神秘主義の源流』 教文館、1988年。

2 推薦図書

ルイ・コニェ 『キリスト教神秘思想史 3』 平凡社、1998年。

H. コアタレム 『聖イグナチオ・デ・ロヨラの『靈操』の解説』 新世社、1996年。

J. カトレット 『十字架の聖ヨハネの靈性』 中央出版社、1982年。

T. アルヴァレス 『城の中へ』 ドン・ボスコ社、1989年。

聖イグナチオ・デ・ロヨラ 『靈操』 新世社、1986年。

十字架の聖ヨハネ 『カルメル山登攀』 ドン・ボスコ社、1975年。

十字架の聖ヨハネ 『暗夜』 ドン・ボスコ社、1987年。

十字架の聖ヨハネ 『愛の生ける炎』 ドン・ボスコ社、1954年。

十字架の聖ヨハネ 『靈の賛歌』 ドン・ボスコ社、1963年。

イエズスの聖テレジア 『靈魂の城』 ドン・ボスコ社、1966年。

イエズスの聖テレジア 『完徳の道』 ドン・ボスコ社、1966年。

第8ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 あなたは真実の意志を鍛練する方法としてどんなことを行ったか。
- 2 神に近づけば近づくほど深い闇に捕らえられるという教父たちの認識をどう思うか。
- 3 魂の暗夜とは何だと思うか、あなたの言葉で答えなさい。
- 4 霊魂の城の比喻のなかで、最も感銘を受けたものは何か。
- 5 霊操の技法のなかで、あなたが実践上でプラスになると感じたものは何か。
- 6 道行きの実践を行ったか、その成果はどうか。
- 7 次の文章をテムラーの最も相応しい変換法で解釈しなさい。
ChTzIK NChThV BI（汝が矢はわたしを射ぬく）（『詩篇』38章3）